令和４年度指定　文部科学省事業

「新時代に対応した高等学校改革推進事業（普通科改革支援事業）」

第３年次　実施状況報告書

福岡県立八幡高等学校

【目次】

1. 本校の状況と事業の概要 ･･･ 1

2. 事業運営体制(運営指導委員会・コンソーシアム・学校担当者) ･････････････････････ 2～6
＊ 申請書の概念図
＊ 年間事業(申請書の計画書の内容で実施した内容の一覧)

3. 運営指導委員会議事 ･･･ 7～10

4. コンソーシアム運営会議議事 ･･ 11～12

5. 教科科目横断型授業 ･･･ 13～29

6. 総合的な探究の時間「夢現∞プロジェクト」 ･････････････････････････････ 30～56

7. 会議議事録(事前説明会、高校 CN オンライン研修 5 回) ････････････････････ 57～67

8. 会議議事録(高校 CN 対面研修 3 回、高校 CN 全国フォーラム) ･･････････････ 68～76

9. 先進校視察(訪問先、訪問日、訪問者等の基礎情報のみ) ･････････････････････ 77

10. 会議録(一覧) ･･･ 78～79

11. 成果概要図 ･･･ 80

＊ 巻末資料
・中学生配布パンフレット
・学校ポスター

1. 本校の状況と事業の概要

(1) 学校を取り巻く状況

【地域】

本校が位置する北九州市八幡東区は、官営八幡製鉄所があった地域であり、明治以降、鉄鋼産業を中心に日本の近代化の一翼を担ってきた街である。一方で高度経済成長期を支えた八幡製鉄所がフル稼働したことで「八幡の空には七色の煙が上がる」と言われたほど、大変な公害を生み出したが、そこから女性たちを中心に環境問題を訴える市民運動が巻き起こり、市民・地域全体で改革へ取り組んだ結果、環境問題から回復した。

現在では八幡東区を含む北九州市としては「SDGs 戦略」を明確に打ち出していることも評価され、経済協力開発機構(OECD)によってアジア初の SDGs モデル都市に選定された。八幡東区は SDGs で触れられている生産性やエコシステムの中で、持続的な環境保全を目指す先進的な地域である。

【学校】

本校の理数科は平成 23 年度から平成 29 年度まで 7 年間スーパーサイエンスハイスクール(以下、「SSH」という。)に指定され、産官学と連携しながら、次世代の科学イノベーション人材の育成に向けて取り組んできた。また、卒業生は大学・企業の研究者も多く輩出しており、約 30 年間にわたる理数科における教育は一定の成果をあげている。

一方普通科は、理数科と切磋琢磨しながら教育活動を展開し、特に SSH 指定期間は、著名な研究者等による講演会を共に聴講し、質疑に参加する等、知的好奇心を刺激する機会に恵まれた。また、学問領域を融合させて事象を分析する視点や思考方法、学問に向かう主体性を育成する活動に取り組んできた。その普通科をさらに深化させ、文理共創科を設立した。

(2) 事業の概要

令和 3 年 1 月の中央教育審議会答申等において、新時代に対応した高等学校教育等の在り方について、高校生の学習意欲を喚起し、可能性及び能力を最大限に伸長するための各高等学校の特色化・魅力化や、教科等横断的な学習の推進による資質・能力の育成が提言された。

令和 3 年 3 月 31 日には学校教育法施行規則等の一部を改正する省令等が公布され、高等学校等の特色化・魅力化に向けて、「普通教育を主とする学科」として「学際領域に関する学科」や「地域社会に関する学科」等が設置可能になった。

本校は、新学科の設置に向けた検討等を行う高等学校等として、令和 4 年度「新時代に対応した高等学校改革推進事業(普通科改革支援事業)」において指定(学際領域に関する学科)を受けた。

本事業の指定を受けて、以下の 2 点をねらいとした。

（ア）SSH の研究テーマであった「科学智の統合」の成果を普通科にも汎用させ、現在も組織的に実施している教科等横断型授業や、SDGs 探究(「夢現プロジェクト」)をより魅力のある教育方法、カリキュラムとして開発する。

（イ）学問の専門深化による学問領域同士のコミュニケーションの喪失を克服し、文理分断的思考から脱却した人材を育成する。

理数科が特に SSH 指定の中で探究してきた「科学智の統合」の理念を、新学科「文理共創科」に継承・発展させることによって、学問の面白さを実感し、知的好奇心に基づいて主体的に学ぶことで、学問領域同士のコミュニケーションを生み出し、文理分断的思考から脱却し、持続可能な社会をしなやかに根気強く創ろうとする人材を育成する。

2. 事業運営体制

○運営指導委員会

（敬称略）

氏名	所属	備考
石丸 哲史	福岡教育大学 副学長	運営指導委員長
日髙 吉三郎	福岡県教育庁 教育振興部 高校教育課長	
喜洲 淳哉	北九州市八幡東区役所 区長	
眞鍋 和博	北九州市立大学 地域創生学群 教授	
栗原 博巳	北九州市立板櫃中学校 校長	
立花 昭一	北九州市立浅川中学校 校長	
南里 幸一	北九州市立高見小学校 校長	
増田 知夏子	北九州市立大蔵小学校 校長	
天津 邦明	JICA 九州センター 市民参加協力課 課長	
内村 尚俊	学校法人福原学園九州女子大学 人間科学部 心理・文化学科 特任教授	

○コンソーシアム

（敬称略）

氏名	所属	備考
西田 将浩	一般社団法人 OCES 代表理事	コンソーシアム運営委員長
城水 裕美子	北九州市 政策局 政策部 政策課 政策調整担当係長	
大山 貴稔	九州工業大学 教養教育院 准教授	
永末 康介	北九州市立大学 基盤教育センター 教授	
田村 馨	福岡大学 商学部 教授	
阿武 勲	社会起業大学 九州校 運営事務局・教頭	
松岡 俊和	タカミヤ環境ミュージアム 館長	
松永 康志	シャボン玉石けん株式会社 取締役 営業本部長	
西山 慶	大英産業株式会社 社長室 コミュニケーション推進課 課長	
大田 純子	公益財団法人地球環境戦略研究機関	
村岡 由利江	日本国際連合協会 福岡県本部	

○学校担当者

（敬称略）

氏名	所属	備考
神谷 輝弘	福岡県立八幡高等学校 校長	
宮﨑 康	福岡県立八幡高等学校 参事兼事務長	
新澤 和幸	福岡県立八幡高等学校 教頭	
中尾 貴里恵	福岡県立八幡高等学校 主幹教諭 教務部	
山吹 二大	福岡県立八幡高等学校 主幹教諭 進路部	
平田 鷹司	福岡県立八幡高等学校 主幹教諭 生徒指導部	
廣濱 一郎	福岡県立八幡高等学校 指導教諭 研修部 新学科推進課 課長	
隈部 英志	福岡県立八幡高等学校 教諭 研修部	
平田 陽子	福岡県立八幡高等学校 教諭 研修部	
松永 一平	福岡県立八幡高等学校 教諭 研修部	
大塚 悠衣	福岡県立八幡高等学校 教諭 研修部	
應地 広久	福岡県立八幡高等学校 講師 研修部	
藤岡 純平	福岡県立八幡高等学校 講師 研修部	
永田 泰寛	福岡県立八幡高等学校 教諭 第２学年主任	
野中 朱実	福岡県立八幡高等学校 教諭 教務部広報課 課長	
溝井 俊太郎	福岡県立八幡高等学校 教諭 進路指導部 キャリア教育課 課長兼総探係	
真子 静佳	福岡県立八幡高等学校 普通科改革支援コーディネーター	

【福岡県立八幡高等学校】学際領域学科（設置（令和6年度））

学際領域学科設置の目的

持続可能な社会をしなやかに根気強く創ろうとする人材の育成

↑

新たな知を生み出す柔軟な創造力

↑

知の統合

自然科学系　＝　人文社会学系

架橋

特色・魅力ある教育の概要

学校設定教科
「知の統合」
教科科目横断型授業

複数の教科科目を融合
- 学問と社会の繋がりの実感
- 学問の意義の感得
- 多角的な視点・思考の獲得
- 知識から知恵の創造
- 高度な思考力・判断力・表現力の育成

‖

ボーダレスな課題を
分析し真理を
見極める視線

‖

総合的な探究の時間
「夢現プロジェクト」

SDGsの達成に向けて
- 課題探究的な学習
- 計画に基づく実践行動
- 成果発表会とコンテストへの参加
- 主体的な行動力と旺盛な学びに向かう力の育成

往還・相乗効果

関連機関との連携・協働体制の構築方法

運営指導委員会

指導・助言

コンソーシアム

八幡高校

コーディネーター

企業・高等教育機関
- SDGsの目標達成に向けた指導助言
- 学際的学びに関する指導助言

行政機関 教育委員会
- 社会の実態の情報提供
- 政治行政的知見の深化
- カリキュラム編成の指導助言

国際機関
- 国際活動を行っている団体による情報提供と専門的知見の深化

地域
- 夢現プロジェクトを介した学校と地域との連携

＊ 令和６年度の年間事業

事業の内容		
月	カリキュラムや教育方法等の開発	関係機関等との連携・協力体制の構築
4 月	・運営指導委員会構築に向けた校内体制の整備 ・運営指導委員会の設置 ・学校設定教科「知の統合」のうち、学校設定科目「知の追究」の実施、学校設定科目「知の探究」の実施	・コンソーシアム構築に向けた校内体制の整備 ・コンソーシアムの設置 ・コーディネーターの配置 ・総合的な探究の時間「夢現プロジェクト」の領域別担当教員の確定
5 月	・第１回運営指導委員会 ・教科科目横断型授業公開授業の効果的実践方法の検討 ・総合的な探究の時間「夢現プロジェクト」成果発表会公開の効果的実践方法の検討	・第１回コンソーシアム運営会議
6 月		・「高校魅力化評価システム」を用いたアンケート調査の実施
7 月	・学校設定教科「知の統合」の指導方法向上に向けた校内研修の推進	・生徒の SDGs 各研究班との協議
8 月		・「高校魅力化評価システム」を用いたアンケート調査の分析
9 月		・総合的な探究の時間「夢現プロジェクト」の活性化 ・校外活動の形態の充実・進化に資する外部機関の活用推進
10 月		
11 月	・学校設定科目「知の追究」の公開授業実施 ・総合的な探究の時間「夢現プロジェクト」の公開授業（オンラインを含む）の開催・協議	・「夢現プロジェクト」中間発表会 ・第２回コンソーシアム運営会議

事業の内容		
月	カリキュラムや教育方法等の開発	関係機関等との連携・協力体制の構築
12 月		・総合的な探究の時間「夢現プロジェクト」の研究内容の継承と深化に向けた方策の検討
1 月	・第 2 回運営指導委員会 事業成果報告、今後の課題 生徒、職員対象の意識調査及び分析結果の共有と次年度事業計画への反映 令和 7 年度事業の展望	・夢現プロジェクト成果発表会 次年度への課題整理 ・第 3 回コンソーシアム運営会議 事業成果報告、今後の課題 生徒、職員対象の意識調査及び分析結果の共有と次年度事業計画への反映 令和 7 年度事業の展望
2 月	・学校設定教科「知の統合」の評価方法の検証 ・指定校視察(熊本市立必由館高等学校)	・次年度事業の企画・検討
3 月	・総合的な探究の時間「夢現プロジェクト」の年間計画検討・作成	・次年度関係機関等との連携・協力体制の構築検討 ・コーディネーター継続配置の推進

3. 運営指導委員会議事

(1) 第1回運営指導委員・コンソーシアム合同会議

【目　的】
　本校における「新時代に対応した高等学校改革推進事業(普通科改革支援事業)」の第2年次実施状況と令和6年度実施計画を運営指導委員及びコンソーシアム構成員に報告し、改善に役立てる。

【実施日】
令和6年5月29日(水)　15時15分～16時15分

【場　所】
本校　会議室

【次　第】
1 学校長挨拶
2 県教育委員会挨拶
3 運営指導委員・コンソーシアム構成員紹介並びに本日出席者の紹介
4 運営指導委員長・コンソーシアム運営委員長選出
5 「新時代に対応した高等学校改革推進事業(普通科改革支援事業)」
　第2年次実施状況報告について
6 令和6年度実施計画書について
7 質疑応答及び指導助言
8 その他

【参加者(敬称略)】
［運営指導委員］
石丸 哲史(福岡教育大学)；日髙 吉三郎(福岡県教育庁)；喜洲 淳哉(北九州市八幡東区役所)；眞鍋 和博(北九州市立大学)；立花 昭一(北九州市立浅川中学校)；増田 知夏子(北九州市立大蔵小学校)；天津 邦明(JICA九州センター)；内村 尚俊(学校法人福原学園九州女子大学)
［コンソーシアム構成員］
西田 将浩(一般社団法人OCES)；城水 裕美子(北九州市役所)；大山 貴稔(九州工業大学)；永末 康介(北九州市立大学)；田村 馨(福岡大学)；阿武 勲(社会起業大学九州校)；松岡 俊和(タカミヤ環境ミュージアム)；西山 慶(大英産業株式会社)；村岡 由利江(日本国際連合協会福岡県本部)
［会議出席者］
菱谷 涼太良(福岡県教育庁)；神谷 輝弘(校長)；宮﨑 康(参事兼事務長)；平田 鷹司(主幹教諭)；廣濱 一郎(指導教諭)；隈部 英志(教諭)；平田 陽子(教諭)；松永 一平(教諭)；藤岡 純平(講師)；永田 泰寛(教諭)；溝井 俊太郎(教諭)；真子 静佳(普通科改革支援コーディネーター)

【協議・意見交換】
○「新時代に対応した高等学校改革推進事業(普通科改革支援事業)」第2年次実施状況報告
(学校より第2年次実施状況を報告後)
(委員)；(夢現∞プロジェクトに関して)今年度新たな取組となったフィールドワークの資料はあるか。

（学校）；後日、運営指導委員・コンソーシアム構成員の皆様へ送付する。
（委員）；各国の SDGs の取組を自団体の HP で閲覧できるようにしている。国際理解や SDGs 学習につながる内容のものもあるので、ぜひ活用してほしい。
（委員）；（教科科目横断型授業に関して）公開授業の動画を見ることができるか。
（学校）；期間限定公開をしたため、現在は御覧いただけない。今年度も公開授業を実施するので、その際に御案内する。
（委員）；学校設定教科「知の統合」の実践が楽しみである。学校設定教科「知の統合」や総合的な探究の時間「夢現∞プロジェクト」と、生徒の進路実現とはどのように結び付いていくと考えているか。
（学校）；これまでの進路指導においても、多様な選択肢があるということを生徒たちに伝えてきた。昨年度の卒業生からも「これを学びたい」「ここで学びたい」という気持ちが強く見て取れたことから、成果として表れていると考えている。大学入試も、総合型選抜導入が増えてくる等、変容してきている。子どもたちが、「何を」「どこで」学びたいのかを基準に進路選択できる指導を継続して行っていく。
（委員）；「生き方・ライフ」が多様化しているのが現代である。大学はゴールではなく、あくまでも通過点であるということを生徒へ伝え、人生を通して多様な考え方を醸成できるような仕組みを作る必要がある。
（学校）；まさにその通りである。様々な「ホンモノ」を感じられる経験の場や学習環境づくりに努めていきたい。
（委員）；総合的な探究の時間での学びが進路選択に与える影響は大きく、他地域でのデータ収集結果においても、進学先が多様化していることが判明している。生徒の探究活動での取組と進路の関係性についてデータで示す工夫があると、中学校への説明の際の説得材料になると考える。

〇令和 6 年度実施計画について
（委員）；同じ普通科改革支援事業指定校との交流等の計画はあるか。
（学校）；一昨年度、昨年度と、本校への視察受け入れをしたり、こちらから先進校視察に伺ったりしたことで、教員同士の情報交換、関係構築は実現している。生徒同士の交流については、今後可能性を探っていく。

〇その他
（委員）；新学科 1 年目となるので、教員の負担軽減や業務効率化といった学校側のアップデートに注目したいと考えている。
（学校）；特に、教科科目横断型授業は、普段の授業準備よりも多くの時間がかかっている。教員に対しては、業務の実態や要望を随時ヒアリングし、可能なところから業務削減を実行するようにしている。また、学校の外に目を向け、同窓会や教育機関、企業、他協力機関に、本校の教育活動に参画・支援していただくよう働きかけている。

(2) 第2回運営指導委員・コンソーシアム合同会議

【目　的】
　本校における「新時代に対応した高等学校改革推進事業(普通科改革支援事業)」の令和6年度成果を運営指導委員及びコンソーシアム構成員に報告し、改善に役立てる。

【実施日】
令和7年1月15日(水)　15時55分～16時45分

【場　所】
本校　誠鏡会館

【次　第】
1 学校長挨拶
2 県教育委員会挨拶
3 運営指導委員・コンソーシアム構成員紹介並びに本日出席者の紹介
4 総合的な探究の時間　成果報告
5 令和6年度事業の総括
6 その他

【参加者(敬称略)】
[運営指導委員]
早川 慎治(福岡県教育庁)；眞鍋 和博(北九州市立大学)；天津 邦明(JICA九州センター)
[コンソーシアム構成員]
西田 将浩(一般社団法人OCES)；城水 裕美子(北九州市役所)；永末 康介(北九州市立大学)；田村 馨(福岡大学)；阿武 勲(社会起業大学九州校)；大田 純子(公益財団法人地球環境戦略研究機関)；村岡 由利江(日本国際連合協会福岡県本部)
[会議出席者]
深江 一美(福岡県教育庁)；宮﨑 康(参事兼事務長)；新澤 和幸(教頭)；中尾 貴里恵(主幹教諭)：山吹 二大(主幹教諭)；平田 鷹司(主幹教諭)；廣濱 一郎(指導教諭)；隈部 英志(教諭)；平田 陽子(教諭)；松永 一平(教諭)；大塚 悠衣(教諭)；應地 広久(講師)；藤岡 純平(講師)；永田 泰寛(教諭)；野中 朱実(教諭)；溝井 俊太郎(教諭)；真子 静佳(普通科改革支援コーディネーター)

【協議・意見交換】
○総合的な探究の時間　成果報告
(学校より令和6年度実施状況を報告後)
(委員)；今年度良かった部分や課題はあるか。
(学校)；フィールドワーク等で生徒が外部に出る機会が多く、当事者意識を持てるようになった。
(学校)；SDGsの17のゴールからテーマを選ぶという枠を取ったことで、課題が身近なものとなり自分事として捉えている印象を受ける。
(学校)；プレゼンテーションの出来栄えや技術力が高くなっている。
(学校)；課題設定と問題解決のプロセスを1年次から学ばせることが課題だと感じてきた。現1年生は今年度よりも3カ月ほど早く課題設定に取り組んでいるため、時間をかけて課題と向き合うことができると想定している。
(委員)；生徒はフィールドワークを肯定的に捉えているようだが、活動を設定する教職員の業務量や負担感についての検討は必要ではないか。
(委員)；ステージ発表班とポスター発表班を比較して完成度の差が大きいように感じたが、そ

の要因は何だと考えられるか。

（学校）；ステージ発表に進んだ班は生徒主体で活動しており、問題解決のプロセスを構築できていたように感じる。授業時間以外の休日や長期休暇を利用して研究を行ったことが高い完成度に繋がっているのではないか。

（学校）；ステージ発表は生徒にとっても１つの大きな指標となっており、そこから漏れた班はどうしてもモチベーションが下がってしまうように感じる。

（学校）；ポスター発表の内容を充実させるより、ポスターの見栄えを良くすることに時間をかけてしまった班もあった。

（学校）；ポスター発表班の中には、選考会の段階からパフォーマンスの到達度が低いものもあった。もう少し早くからその指導に時間を費やせればよかった。

（委員）；ポスター発表班に対する（敗者復活戦のような）新たな仕組みづくりをして、モチベーションの向上を図るとよいのではないか。

（委員）；問題の事実確認の工程に時間をかけずに探究を進めてしまっていることが、課題設定が不十分となる要因であると考えるが、現１年生の状況はどうか。

（学校）；現１年生は２学期に、企業や大学から提供していただいた課題に取り組む探究を実施した。課題提供者からのサポートを受けながら課題の深掘りや原因追究に時間をかけたことで、課題設定に対する意識、事実確認能力が向上しているように感じる。

〇令和６年度総括

学校より、以下の説明及び報告を行った。

・本校の基本情報と普通科改革支援事業について
・学校設定教科「知の統合」、総合的な探究の時間「夢現∞プロジェクト」実施状況について
・運営指導委員会とコンソーシアム運営会議の議事について
・CN 研修会と公開授業の実施状況について
・高校魅力化アンケートの結果について
・CN と教員の連携について
・次年度以降の連携協力体制継続依頼について

4. コンソーシアム運営会議議事

(1) 第2回コンソーシアム運営会議

【実施日】
令和6年11月13日(水)　15時55分～16時45分

【場　所】
本校　誠鏡会館

【次　第】
1 学校長挨拶
2 審査・運営について
3 「夢現∞プロジェクト」テーマ・内容について
4 その他

【参加者(敬称略)】
［コンソーシアム構成員］
西田 将浩(一般社団法人OCES)；大山 貴稔(九州工業大学)；永末 康介(北九州市立大学)；田村 馨(福岡大学)；阿武 勲(社会起業大学九州校)；西山 慶(大英産業株式会社)
［会議出席者］
菱谷 涼太良(福岡県教育庁)；神谷 輝弘(校長)；宮﨑 康(参事兼事務長)；新澤 和幸(教頭)；平田 鷹司(主幹教諭)；廣濱 一郎(指導教諭)；隈部 英志(教諭)；平田 陽子(教諭)；松永 一平(教諭)；大塚 悠衣(教諭)；藤岡 純平(講師)；永田 泰寛(教諭)；野中 朱実(教諭)；溝井 俊太郎(教諭)；真子 静佳(普通科改革支援コーディネーター)

【協議・意見交換】
○審査・運営について
(学校より、第2学年生徒の2学期以降の様子について紹介、及び「夢現∞プロジェクト選考会」における審査の実施方針や生徒の取組状況について説明)
(学校)；2学期は、体育大会と修学旅行が実施された学期であった。行事を経て、コミュニケーション能力やリーダーシップが育成できていると実感している。本日の夢現∞プロジェクト選考会については、リハーサルと比較して能力の伸長が見られているが、今後の課題点もあるので、成果発表会での改善が期待できる。
(学校)；夢現∞プロジェクトに関して昨年度との変更点としては、フィールドワークの実施とCEOオーディションへの参加が今年度初めての試みである。特に、フィールドワークでは、現地調査や各機関訪問により課題との向き合い方を学ばせることができ、その後の探究ガイダンスでは、専門的知見を持つ先生方から課題の捉え方に対する新たな視点や研究活動に関する助言をいただくことができた。今年度の選考会は、4会場で実施したことで1会場あたり6～7班で発表を行うことができ、質疑応答の時間を充実させることができたと感じている。選考会での評価は、探究の4段階のプロセスを基軸にルーブリックで観点を立てている。本日のように大人に価値づけをしてもらう場は貴重だと感じている。
(委員)；どのようなフィールドワークをしたのか。
(学校)；フィールドワークを通して地域を客観的に見ることにより、探究活動へのオリジナルの視点を得ることを目的に5月に実施した。終日2部制の取組とし、例えば午前中は協力団体を訪問し、担当の方からガイダンスを受け、午後は自由に街中を散策し課題を探すという活動を行った。事前に生徒からの質問を収集し、協力団体との調整を図

った。
（委員）；夢現∞プロジェクト主担当の教員やコーディネーターが、今年の運営を行って苦労した点があれば教えてほしい。
（学校）；選考会や座談会等での会場の設定や外部機関との連絡調整。探究活動全般においては、生徒の主体的な姿勢があるので、支援をとても難しいと感じることは少ない。
（学校）；コーディネーターがいないと大変であると思う。教員以外からの指導は生徒にとって貴重な経験だと感じている。コーディネーターと教員の役割分担ができているのがよい。書類作成や手続き等システム的な側面では、不要なものを省いたり簡略化したりすることで改良できる余地もあると思っている。
（委員）；担当学年の教員から見て苦労した点はあるか。
（学校）；教員同士や教員とコーディネーターでの打ち合わせ及び連絡共有のための、時間や場を確保することが難しい。理数科の課題研究にも人員が必要であるので、配置が難しい。
◯「夢現∞プロジェクト」テーマ・内容について
（委員）；机上ではなく、試作品の製作等の実践に移せているところがよい。また、本日の選考会は昨年と比較し、生徒同士の質疑応答が盛んであったと感じる。過去の学年の探究が後輩に継承されているところがよい。
（委員）；アンケート調査や現地調査を行っているところがよい。今年度は特にプレゼン能力（構成・表現）が高いと感じた。課題点は、取組課題の絞り込みが不十分であるため、課題からアクションプランへの飛躍が起きてしまっている班が多数見られたこと。課題との向き合い方、問題に対する原因の追究を丁寧に行う必要がある。
（委員）；普段の生活と探究活動の関連性をどう作るのかが課題である。
（委員）；アクションプラン（解決策）に重きを置きすぎていると感じた。分析・考察をもとにしていない探究班が多い印象であったので、課題の発見・設定により多くの時間を費やす必要がある。例えば、商店街の活性化を課題にしている班が多数あったが、なぜ集客が落ちているのか、そもそも商店街は活性化しなければならないのかの原因追究や事実確認、分析ができてきない。その部分に時間をかけることで、本当の課題やターゲットを絞り込むことができる。
（委員）；前述と同意見であり、課題設定の時期をもっと多くとる必要性を感じる。
（学校）；限られた時間の中での配分の仕方は課題だと感じている。身近な課題から大きな社会課題へと視野を広げるために、教員ができることはあるか。
（委員）；教員が持つ意識は２点。１つ目は、探究の方法論について、どのように進めていくかの精度を上げること。２つ目は、教育活動の成果の部分をどのように評価するかを捉えること。
（委員）；現在の１年生の探究はアクションプランに走っていない印象であるので、次年度は違った成果を期待できそうである。
（委員）；原因を追究する姿勢を整えさせるとよい。解決策を単なる手段にしないように導く必要がある。
（委員）；課題という言葉は抽象度が高いので、まずは「課題とは何か」、生徒の理解を深めさせる場があるとよい。また、「探究とは何か」という思考のフレームワークを実践の前に行ってはどうか。

5. 教科科目横断型授業

(1) 概要

複数の教科科目を融合することで初めて見えてくる物事や事象の諸相を分析することで、学問と社会との繋がりや、生きる上での学問の意義を感得させ、自ら主体的に学問に向き合っていく姿勢を育成し、実践につなげる。

なお、教科等横断型授業については、平成29年度から7年間にわたって実施し、さらに、令和元年度からの6年間は全教員で取り組んでおり、多種多様な教科科目の組合せでバリエーションに富む内容を行ってきた豊富な実績がある。この取組はベネッセの「VIEW21」やリクルートの「キャリアガイダンス」でも紹介されている。

(2) 取組内容

全学年にわたり、学校設定教科「知の統合」(各学年1単位、合計3単位)を開設し、教科等横断型授業を実施する。

これまでも教科等横断型授業を実践してきており、主体的対話的で深い学びに深化させ、体系的に整理するために研究開発を行う。

(例)

・学習の目標 … 現代医療の在り方を探究する契機とする
・学習の内容 … 多角的アプローチから日本人特有の死生観、生と死の科学性・社会性を分析し、現代医療の展望と限界を考察する
・学習の方法 … 生物、公民、英語の教員が同教室同時間で授業を実施
・テーマ … 「臓器移植」
・生物 … 拒絶反応を抑える免疫抑制剤の使用を学習の教材とした免疫の学習
・公民 … 「臓器移植法」の成立過程や改正点、他国との相違、法律的な死としての脳死、デカルトから始まる心身二元論などの観点から学習
・英語 … 日本人ほどに脳死に違和感を覚えない西欧の文化風土や死生観、死に関する語彙の相違などの観点から学習

(3) 一般公開

・日時

令和6年11月15日(金)　9時10分～12時50分

・目的

新学科の特色の1つである教科科目横断型授業の取組の成果を、通学域にある中学校教員及び普通科改革支援事業指定校に周知する。

・参加人数

28名(普通科改革支援事業指定校教員、運営指導委員、近隣中学校教員、福岡県立高校教員、近隣大学院生、その他団体職員等)

(4) 令和６年度実施報告例

学年	ﾃｰﾏ NO.	教科	タイトル	教室	実施時間
1学年	①	英語×理科	How can we promote sustainability?	1年6組	2・③・4
	②	理科×国語	色彩と言語表現	1年7組	②・3・4
	③	社会×数学	八高坂と地獄坂	1年3組	②・3・4
	④	国語×体育	スポーツと社会問題	1年4組	②・3・4
	⑤	数学×英語	日本と外国の数学教育の違い	1年5組	2・③・4
2学年	⑥	理科×英語	人工衛星とスペースデブリ	2年5組	2・③・4
	⑦	家庭科×理科	被服素材～科学的に観察しよう～	2年6組	2・③・4
	⑧	国語×数学	和算～日本人の数学センス～	2年7組	2・③・4
	⑨	数学×社会	当選確実の数理	2年3組	②・3・4
	⑩	英語×国語	英語で和歌を鑑賞する	2年4組	②・③・4
3学年	⑪	英語×体育	パフォーマンスの向上とタイムマネジメント	3年6組	②・3・4
	⑫	理科×英語	天体と神話 ～宇宙探査からわかる地球外生命存在の可能性～	3年7組	②・③・4
	⑬	社会×国語	環境問題 ～国語と地理の問い方の違い～	3年3組	2・3・④
	⑭	国語×英語	徒然草を英訳する	3年4組	2・③・4
	⑮	数学×理科	条件付き確率と遺伝	3年5組	②・3・4

(5) 教科科目横断型授業の実際の例

教科・科目	外国語(英語コミュニケーションⅠ)	理科(化学基礎)
テーマ	How can we promote sustainability？	
実施学級・日時 ＊同内容で実施するコマを記入	1クラス目　1年　5組　40名　令和6年　9月　30日(月) 2クラス目　1年　4組　39名　令和6年　10月　17日(木) 3クラス目　1年　3組　40名　令和6年　10月　29日(火) 4クラス目　1年　7組　40名　令和6年　11月　6日(水) 5クラス目　1年　6組　40名　令和6年　11月　15日(金)	
内　容	英語コミュニケーションⅠ教科書Unit3 How can we promote sustainability?で扱う徳島県上勝町のゼロ・ウェイスト政策を題材に、生徒自身が取り組みたい持続可能な活動について考え発表する。 化学・生物の観点から「ごみとはなにか」、物質の構造や自然界における循環について学ぶ。	

1限目

展開	学習内容・活動
導入：(5分)	本時の学習内容確認(英語)
講義1：(5分)	上勝町についての動画視聴
講義2：(10分)	sustainabilityの定義・考え方について
講義3：(25分)	上勝町でのゼロ・ウェイスト政策、ごみの分別について
まとめ：(5分)	まとめ

2限目

展開	学習内容・活動
導入：(5分)	本時の学習内容確認(理科)「ごみ」とはなにか
講義1：(20分)	物質の構造、自然界における物質の循環について
講義2：(10分)	分別の目的と必要性について
講義3：(15分)	持続可能な活動を考える(英語)発表準備

3限目

展開	学習内容・活動
講義1：(20分)	持続可能な活動を考える(英語)発表準備
講義2：(20分)	持続可能な活動を考える　発表・相互評価
まとめ：(10分)	まとめ

教科・科目	理科	国語
テーマ	色彩と言語表現	
実施学級・日時 ＊同内容で実施するコマを記入	1クラス目　1年　6組　40名　令和6年　9月　30日(月) 2クラス目　1年　5組　40名　令和6年　10月　17日(木) 3クラス目　1年　4組　40名　令和6年　10月　29日(火) 4クラス目　1年　3組　40名　令和6年　11月　6日(水) 5クラス目　1年　7組　40名　令和6年　11月　15日(金)	
内　容	小説「君たちはどう生きるか」(吉野源三郎)を通して「月」について考える。この作品では、月を題材とした物語が展開されている。その中で、今回は月に関する言語表現を例として、背景や登場人物の心情について考えるとともに、光の本質や色彩が人間に与える心理的生理的効果について考察していく。	

1限目

展開	学習内容・活動
導入：(5分)	月に関する知識を確認する。
講義1：(30分)	・「君たちはどう生きるか」の一部を読み、月に関する表現から季節や登場人物の心情を考える。 ・百人一首と山月記から、月に関する表現から季節や登場人物の心情を考える。 ・月が様々な色に見えることについて考える。
講義2：(13分)	・背景色による色彩の違いを観察する。 ・色彩が人間に与える心理的効果について考える。
まとめ：(2分)	次時の予告

2限目

展開	学習内容・活動
導入：(5分)	発光現象(炎色反応)に関する知識を確認する。
講義1：(30分)	炎色反応の演示実験より、実際に見える色と、分光器で観察した色の違いについて観察する。
講義2：(13分)	光の本質について考察する。
まとめ：(2分)	次時の予告

3限目

展開	学習内容・活動
導入：(2分)	前時までの学習内容を確認する。
講義：(40分)	・発光と反射光の違いを考える。 ・脳が色を認識することを補色の残像によって確認する。 ・色彩が人間に与える心理的生理的効果について考察する。
まとめ：(8分)	学習内容をまとめる。

教科・科目	地理歴史・公民	数学
テーマ	八高坂と地獄坂	
実施学級・日時 ＊同内容で実施するコマを記入	1クラス目　1年　7組　40名　令和6年　9月　30日(月) 2クラス目　1年　6組　40名　令和6年　10月　17日(木) 3クラス目　1年　5組　40名　令和6年　10月　29日(火) 4クラス目　1年　4組　40名　令和6年　11月　6日(水) 5クラス目　1年　3組　40名　令和6年　11月　15日(金)	
内　容	通学路の一部である坂に着目し、坂の入口から学校正門までの距離を地図上で確認する方法を学ぶ。三角関数を活用して坂の傾斜を計算できるようにする。学校内のスロープの傾斜を実際に計測することで、普段の生活の中で数学の考え方が活用できることを実感できるようなり、学校のバリアフリーに関心を高め、より暮らしやすい学校にするための方策を考える。	

1限目

展開	学習内容・活動
導入：(5分)	通学路の坂に着目させる。
講義1：(20分)	地理院地図(電子国土web)を用いて、任意の地点の標高や、地点間の距離の測り方を身に付ける。
講義2：(20分)	坂の角度について、三角関数を用いて計算できるようにする。
まとめ：(5分)	次時の予告

2限目

展開	学習内容・活動
導入：(5分)	活動内容の説明
講義1：(15分)	班に分かれ、学校内にあるスロープの角度を測る。
講義2：(25分)	調べたことをグーグルスライドにまとめ、発表準備をする。
まとめ：(5分)	次時の予告

3限目

展開	学習内容・活動
導入：(5分)	活動内容の説明
講義：(40分)	各班の発表
まとめ：(5分)	担当教員の講評

教科・科目	国語	保健体育
テーマ	スポーツと社会問題	
実施学級・日時 ＊同内容で実施するコマを記入	1クラス目　1年　3組　40名　令和6年　9月　30日(月) 2クラス目　1年　7組　40名　令和6年　10月　17日(木) 3クラス目　1年　6組　40名　令和6年　10月　29日(火) 4クラス目　1年　5組　40名　令和6年　11月　6日(水) 5クラス目　1年　4組　40名　令和6年　11月　15日(金)	
内　容	健康と運動についての資料を読み取り、現代社会の問題について理解する。日頃の忙しさから運動に時間をかけることのできない現代の人々にとって取り組みやすく楽しめるスポーツについて調べ、検証し、考察する。	

1限目

展開	学習内容・活動
導入：(5分)	本日の流れについて確認・資料配付
講義1：国語(20分)	資料の読み取り方について教科書で確認し、資料の見方や、資料を読み取ることで理解できる社会問題について考える。
講義2：体育(20分)	スポーツがどのように人々の生活に関わり、健康維持のために必要であるかを体育理論の面から説明する。
まとめ：(5分)	取り組みやすいスポーツについて紹介し、2時間目の準備説明を行う。

2限目

展開	学習内容・活動
導入：(5分)	・取り組みやすいスポーツについての注意・説明・チーム分け ・老若男女に関わらず、どうしたらより面白くなるか、取り組みやすくなるか、運動量が増えるか考えさせる。
講義：体育(40分)	スポーツの実施・検証
まとめ：(5分)	諸注意・後片付け

3限目

展開	学習内容・活動
導入：(3分)	レポート作成の確認。プリント配布。
講義1：国語(7分)	教科書でレポートの書き方を確認する。
講義2：体育(10分)	2時間目に行ったスポーツについての確認、ルールの工夫や改善点などを入れるように説明する。
講義3：国語(20分)	レポート作成し、その後班でそれぞれ発表し合う。
まとめ：(10分)	感想・考察を書く。

教科・科目	数学(数学Ⅰ)	外国語(英語コミュニケーションⅠ)
テーマ	日本と外国の数学教育の違い	
実施学級・日時 ＊同内容で実施するコマを記入	1クラス目　1年　4組　39名　令和6年　9月　30日(月) 2クラス目　1年　3組　40名　令和6年　10月　17日(木) 3クラス目　1年　7組　40名　令和6年　10月　29日(火) 4クラス目　1年　6組　40名　令和6年　11月　6日(水) 5クラス目　1年　5組　40名　令和6年　11月　15日(金)	
内　容	日本と外国(アメリカ)の数学(算数)教育の違いを体験することで、思考のプロセスや教育で重視する内容の違いを知り、教育の在り方から文化・社会的背景の違いに着目し、国際理解を深めるきっかけとする。また、アメリカの数学的アプローチと日本の数学的アプローチのそれぞれの良さに気づき、数学的思考力を育成する。	

1限目

展開	学習内容・活動
導入：(5分)	本時の学習内容確認(英語)
講義1：(5分)	カードを用いた数学用語の確認
講義2：(20分)	英語での四則演算の表現の仕方
講義3：(15分)	アメリカ小学生の算数到達度テスト(リスニング問題)
まとめ：(5分)	まとめ

2限目

展開	学習内容・活動
導入：(5分)	本時の学習内容確認(数学)
講義1：　(5分)	アメリカと日本の数学教育の違いとイメージ
講義2：(25分)	アメリカ式数学(算数)教育の体験①
講義3：(10分)	発表と考察
まとめ：(5分)	まとめ

3限目

展開	学習内容・活動
講義1：(30分)	アメリカ式数学(算数)教育の体験②
講義2：(10分)	問題交換と意見交換
まとめ：(10分)	まとめ

教科・科目	理科	英語
テーマ	人工衛星とスペースデブリ	
実施学級・日時 ＊同内容で実施するコマを記入	1クラス目　2年　7組　38名　令和6年　9月　30日(月) 2クラス目　2年　6組　38名　令和6年　10月　17日(木) 3クラス目　2年　3組　39名　令和6年　10月　29日(火) 4クラス目　2年　4組　38名　令和6年　11月　6日(水) 5クラス目　2年　5組　38名　令和6年　11月　15日(金)	
内　容	スペースデブリについて書かれている英文を読み解き、そこに書かれている内容を理科的な観点で深く学習していく。宇宙の境目、人工衛星や国際宇宙ステーションの軌道を回る速さ、スペースデブリが衝突により与えるエネルギーの大きさについて学習していく。	

1限目

展開	学習内容・活動
導入：(5分)	活動内容の説明
講義1：(10分)	英語の動画を見てスペースデブリの概要を掴む。
講義2：(30分)	動画の内容を英文で読み、さらに具体的に考察を深める。
まとめ：(5分)	次時の予告

2限目

展開	学習内容・活動
導入：(5分)	活動内容の説明
講義1：(20分)	地球の大きさと宇宙のスケールを確認する。
講義2：(20分)	スペースデブリの大きさ、分布状況、エネルギーの大きさについて考察していく。
まとめ：(5分)	次時の予告

3限目

展開	学習内容・活動
導入：(5分)	活動内容の説明
講義：(40分)	(文系)宇宙の仕事に関する内容を調べ、各班発表を行う。 (理系)慣性力(遠心力)について学ぶ。
まとめ：(5分)	担当教員の講評

教科・科目	家庭科(家庭基礎)	理科(化学)
テーマ	被服素材　～科学的に観察しよう～	
実施学級・日時 ＊同内容で実施するコマを記入	1クラス目　2年　7組　38名　令和6年　9月　30日(月) 2クラス目　2年　3組　38名　令和6年　10月　17日(木) 3クラス目　2年　4組　38名　令和6年　10月　29日(火) 4クラス目　2年　5組　39名　令和6年　11月　6日(水) 5クラス目　2年　6組　38名　令和6年　11月　15日(金)	
内　容	毎日身に着けている被服は、繊維の種類・構造により着心地の良し悪しが決まる。科学的な視点で繊維を観察することで理解を深めることを目的とする。被服の構造の違い、繊維の組成の違いが被服の性能に影響する。また、原料を化学式で表すことで、繊維の特性が見えてくることに気づかせる。繊維の特性を知る手立てとして、繊維を燃焼させてその原料の違いを確かめさせる。また、原料の違いに応じた被服管理の方法を考察する。発展課題として、従来とは異なる新たな特徴を持たせた新繊維について紹介する。	

1限目

展開	学習内容・活動
導入：(5分)	被服の性能とは
講義1：(20分)	被服構造と繊維の種類・特徴が性能に及ぼす影響
講義2：(20分)	繊維の化学構造から特徴を考える。
まとめ：(5分)	化学的判別方法の紹介

2限目

展開	学習内容・活動
導入：(10分)	繊維の燃焼実験説明
実験：(30分)	繊維の燃焼実験(燃え方、におい、灰の様子、酸・塩基に対する溶け方)
まとめ：(10分)	繊維の判別結果の発表、実験の感想

3限目

展開	学習内容・活動
導入：(3分)	繊維の燃焼実験の結果からの考察
講義1：(30分)	異形断面繊維について
講義2：(10分)	被服管理について～繊維原料と界面活性剤～
まとめ：(7分)	繊維技術の進歩とその普及について

教科・科目	国語	数学
テーマ	和算――日本人の数学センス――	
実施学級・日時 ＊同内容で実施するコマを記入	1クラス目　2年　3組　38名　令和6年　9月　30日(月) 2クラス目　2年　4組　38名　令和6年　10月　17日(木) 3クラス目　2年　5組　39名　令和6年　10月　29日(火) 4クラス目　2年　6組　38名　令和6年　11月　6日(水) 5クラス目　2年　7組　38名　令和6年　11月　15日(金)	
内　容	日本独自に発達した、江戸時代の「和算」について学ぶ。九九や算盤が中国から伝来して後、生活に即した実用的な算法を経て、日本の数学(和算)は、江戸時代に急速な発展を遂げ、世界最高水準にまで達していた。その発展を支えた吉田光由の『塵劫記』と、全国の神社仏閣に奉納された「算額」(数学の問題の絵馬)を紹介し、実際にその数学の問題を解く。	

1限目

展開	学習内容・活動
導入：(2分) 「算額」紹介	江戸時代、神社仏閣に盛んに奉納された「算額」について知る。
講義1：(25分) 埼玉県安楽寺「算額」	「算額」の問題(三角形の2つの内接円の半径)を実際に解き、解説・解答を聞く。
講義2：(10分) 福島県文殊堂「算額」①	「算額」の漢文で書かれた問題文(一次不定方程式)を現代語訳する。
講義3：(13分) 福島県文殊堂「算額」②	現代語訳した問題文を実際に解く。

2限目

展開	学習内容・活動
導入：(3分) 「和算」紹介	「和算」の呼称等について簡単な紹介を聞く。
講義1：(10分) 古代の日本の数字意識	「九九」の木簡・『万葉集』「戯書」・弁慶の数字の短歌をみる。
講義2：(10分) 算盤と『塵劫記』	『塵劫記』がなぜ江戸時代最大のベストセラーとなったかを知る。
講義3：(27分) 『塵劫記』内容紹介	『塵劫記』に掲載されている「俵杉算」「椿の目付字」を実際に解き、解説・解答を聞く。

3限目

展開	学習内容・活動
導入：(1分)	前時の問題の続きをする。
講義1：(20分) 福島県「算額」③	問題の解法と解説を聞く。
講義2：(10分) 「和算」と西洋数学史	「和算」と西洋数学のそれぞれの発達の歴史を知り、比較する。
講義3：(10分) 「伊勢物語『東下り』」	「東下り」にある、富士山と比叡山の大きさの比較について考える。
まとめ：(9分)	グーグルフォームにて授業の感想をまとめる。

教科・科目	数学	地歴公民
テーマ	当選確実の数理	
実施学級・日時 ＊同内容で実施するコマを記入	1クラス目　2年　4組　38名　令和6年　9月　30日(月) 2クラス目　2年　5組　39名　令和6年　10月　17日(木) 3クラス目　2年　6組　38名　令和6年　10月　29日(火) 4クラス目　2年　7組　38名　令和6年　11月　6日(水) 5クラス目　2年　3組　38名　令和6年　11月　15日(金)	
内　容	報道番組等の選挙速報において、開票率が少ないにも関わらず当選確実が出される。これは、投票所において出口調査を行っているためである。 本授業では選挙における投票や出口調査の仕組みを理解し、当選確実がどのような基準で出されるのか、統計学・確率論の観点から考察する。	

1限目

展開	学習内容・活動
導入：(5分)数学科	当選確実は本当に「確実」であるか考える。
講義1：(15分)社会科	投票や出口調査の仕組みについて学ぶ。
講義2：(25分)数学科	二項分布について学ぶ。
まとめ：(5分)数学科	次時の予告

2限目

展開	学習内容・活動
導入：(5分)数学科	前時の復習
講義1：(15分)数学科	正規分布について学ぶ。
講義2：(25分)数学科	二項分布が近似的に正規分布に従うことを利用して、確率の計算をする。
まとめ：(5分)数学科	次時の予告

3限目

展開	学習内容・活動
導入：(5分)数学科	2 限目の計算結果から、母比率と標本比率が高い確率で近い値になることを確認する。
講義1：(10分)社会科	当選確実が覆った例についての話を聞く。
講義2：(30分)数学科	母比率の区間推定の考え方を学び、当選確実を出すことができる標本比率の計算をする。
まとめ：(5分)数学科	まとめ

教科・科目	外国語(英語コミュニケーションⅡ)	国語
テーマ	英語で和歌を鑑賞する。	
実施学級・日時 ＊同内容で実施するコマを記入	1クラス目　2年　5組　39名　令和6年　9月　30日(月) 2クラス目　2年　6組　38名　令和6年　10月　17日(木) 3クラス目　2年　7組　38名　令和6年　10月　29日(火) 4クラス目　2年　3組　38名　令和6年　11月　6日(水) 5クラス目　2年　4組　38名　令和6年　11月　15日(金)	
内　容	英語コミュニケーションⅡ教科書Lesson 6 One hundred poets, one poem each で学習したピーター・マクミラン氏による百人一首の英訳について国語科から解説を行ってもらう。また、英語で詩作を行い、創作や鑑賞の姿勢を育てる。	

1限目

展開	学習内容・活動
導入：(5分)	百人一首について(英語科・国語科)
講義1：(15分)	7番天の原…について
講義2：(15分)	16番立別れ…について
講義3：(15分)	5番奥山に…について

2限目

展開	学習内容・活動
講義1：(15分)	9番花の色は…について
講義2：(5分)	詩作について(国語科)
講義3：(30分)	英語の俳句について　日本語で創作(英語科)

3限目

展開	学習内容・活動
講義1：(20分)	英語の俳句を英語で創作(英語科)
講義2：(20分)	創作した英語の俳句の発表(英語科)
まとめ：(10分)	まとめ

教科・科目	外国語(英語コミュニケーションⅢ)	保健体育(体育)
テーマ	パフォーマンスの向上とタイムマネジメント	
実施学級・日時 ＊同内容で実施するコマを記入	1クラス目　3年　3組　41名　令和6年　10月　29日(火) 2クラス目　3年　4組　40名　令和6年　10月　17日(木) 3クラス目　3年　5組　40名　令和6年　9月　30日(月) 4クラス目　3年　6組　37名　令和6年　11月　15日(金) 5クラス目　3年　7組　37名　令和6年　11月　6日(水)	
内　容	大学入学試験などでパフォーマンスを高めるために、タイムマネジメントに関して学ぶ。また、いかにして精神的・肉体的パフォーマンスを高めたらよいかについて、スポーツにおけるパフォーマンス向上の方法を通して学ぶ。その後実践演習を行う。	

1限目

展開	学習内容・活動
導入：(5分)	本時の流れの説明
講義1：(30分)	スポーツにおけるパフォーマンスの向上について(体育)
講義2：(10分)	タイムマネジメントの実践演習(英語)
まとめ：(5分)	本時の振り返り(ワークシートを記入)

2限目

展開	学習内容・活動
導入：(5分)	本時の流れの説明
演習：(45／80分)	リーディング問題を解いてタイムマネジメントの演習(英語)

3限目

展開	学習内容・活動
演習：(35／80分)	リーディング問題を解いてタイムマネジメントの演習(英語)
まとめ：(15分)	各問いに要した時間と配当時間を比較し、ワークシートに記入

＊(2･3限は連続した内容)

教科・科目	理科(地学)	英語
テーマ	・天体と神話 ・宇宙探査からわかる地球外生命存在の可能性	
実施学級・日時 ＊同内容で実施するコマを記入	1クラス目　3年　6組　37名　令和6年　9月30日(月) 2クラス目　3年　7組　37名　令和6月　11月15日(金)	
内　容	近年、観測技術(高性能望遠鏡)や宇宙探査技術(はやぶさなど)の進展により、宇宙の理解が進んでいる。土星の探査機カッシーニがもたらしたデータに関する記事が 2019 年に発表された。その記事の内容を読み解き、地球外生命の存在について科学的に考察する。また、土星(Saturn)をはじめ天体の名称は西洋の神話に由来するものが多い。天体の名称と神話の関係について、太陽系の天体や星座を例に考える。	

1限目

展開	学習内容・活動
導入：(5分)	天体に関する講義
講義1：(30分)	天体と神話について
講義2：(14分)	土星の衛星に関する記事を読む。
まとめ：(1分)	次時の予告

2限目

展開	学習内容・活動
導入1：(1分)	前時の流れの確認
講義1：(24分)	記事の内容について解説し、地球外生命存在の可能性について科学的に考察する。
まとめ：(10分)	考えたこと、感想の記入と次時の予告
導入2：(2分)	活動内容の説明
講義2：(13分)	地学に関する問題演習

3限目

展開	学習内容・活動
講義1：(10分)	地学に関する問題演習
講義2：(40分)	解答の確認、解説

教科・科目	地理探究(文系は公共)	国語
テーマ	環境問題～国語と地理の問い方の違い	
実施学級・日時 ＊同内容で実施するコマを記入	1クラス目　3年　7組　38名　令和6年　9月　30日(月) 2クラス目　3年　6組　37名　令和6年　10月　17日(木) 3クラス目　3年　5組　40名　令和6年　10月　29日(火) 4クラス目　3年　4組　40名　令和6年　11月　6日(水) 5クラス目　3年　3組　41名　令和6年　11月　15日(金)	
内　容	同一のテーマが地理探究(公共)・国語の共通テスト対策問題でどのように出題されているのかを確認し、それぞれの教科・科目で求められている資質・能力は何か考察させる。また、その資質・能力を使って何をすることが社会に求められているのかを議論し、卒業後の進路実現に役立てる。	

1限目

展開	学習内容・活動
導入：(5分)	本時の目的を理解させる。
講義：(20分)	環境問題に関する既習事項を小テストで確認する。
演習：(20分)	環境問題を取り扱った演習問題に取り組み、代表者が解説をする。
まとめ：(5分)	次時の予告

2限目

展開	学習内容・活動
導入：(5分)	本時の目的を確認する。
演習：(20分)	環境問題を取り扱った実用的な文章の問題を解く。
講義：(20分)	代表者による解説と並行して、教員が補足の解説を実施する。
まとめ：(5分)	次時の予告

3限目

展開	学習内容・活動
導入：(5分)	活動内容の説明
講義1：(25分)	国語と地理の問題で必要な力を分析し、それぞれの共通点・相違点をスプレッドシートに入力し、共有する。
講義2：(15分)	なぜこのような問題が出題されるようになったか、社会的背景を考察させ、google formに入力する。
まとめ：(5分)	担当教員の講評

教科・科目	国語(古典探究)	外国語(英語コミュニケーションⅢ)
テーマ	徒然草を英訳する。	
実施学級・日時 ＊同内容で実施するコマを記入	1クラス目　3年　3組　41名　令和6年　9月　30日(月) 2クラス目　3年　7組　38名　令和6年　10月　17日(木) 3クラス目　3年　6組　37名　令和6年　10月　29日(火) 4クラス目　3年　5組　40名　令和6年　11月　6日(水) 5クラス目　3年　4組　40名　令和6年　11月　15日(金)	
内　容	まずは、徒然草の一節を現代語訳することを通じて、兼好法師の感じたしみじみとした情感を理解する。そのうえでドナルド・キーンによる同書の翻訳を学び、わが国の言語文化における「あはれ」の意味を捉えなおす。「あはれ」という言葉でしか表現できない感情を理解することを通して、言語文化の違いを実感させる。	

1限目

展開	学習内容・活動
導入：(5分)	『徒然草』に関する復習をする。
演習1・講義1：(30分)	『徒然草』の現代語訳・解釈をする。
講義2：(5分)	ドナルド・キーンについて知る。
演習2：(10分)	『徒然草』の英訳を行う。

2限目

展開	学習内容・活動
演習1：(8分)	各自で考えた英訳を班で共有する。
演習2・講義1：(30分)	各班の英訳を共有し、ドナルド・キーンの英訳を知る。
演習3・講義2：(12分)	「あはれ」の英訳を考える。

3限目

展開	学習内容・活動
演習1・講義1：(10分)	ドナルド・キーンの「あはれ」の英訳が、「moved」であることへの評価を行う。
演習2：(30分)	「翻訳をめぐる7つ非現実的な断章」(沼野充義)を読んで、翻訳について考える。
まとめ：(10分)	3時間の授業を通して、考えたことをレポートにまとめる。

教科・科目	数学	理科(生物)
テーマ	条件付き確率と遺伝	
実施学級・日時 ＊同内容で実施するコマを記入	1クラス目　3年　4組　40名　令和6年　9月　30日(月) 2クラス目　3年　3組　41名　令和6年　10月　17日(木) 3クラス目　3年　7組　38名　令和6年　10月　29日(火) 4クラス目　3年　6組　37名　令和6年　11月　6日(水) 5クラス目　3年　5組　40名　令和6年　11月　15日(金)	
内　容	伴性遺伝における確率を求める際に、条件付き確率を用いて解法する問題を取り上げる。また、病気の遺伝子の伝わり方や病気に罹患しているかの検査(陽性・陰性)について学び、その確率を考える。	

1限目

展開	学習内容・活動
導入：(10分)	身近な遺伝について着目させる。
講義1：(20分)	ABO式血液型の遺伝について学習し、配偶子に伝わる遺伝子の組み合わせによって、子の表現型が決まることを理解する。
講義2：(20分)	家系図を用いて、血友病の遺伝の特性について学習し、性によって表現型の分離比が異なることを理解する。

2限目

展開	学習内容・活動
導入：(10分)	数学Aにおける条件付き確率について例題を確認する。
講義1：(20分)	条件付き確率を利用する問題を解き、解答を確認する。
講義2：(20分)	条件付き確率を踏まえて、血友病の遺伝子を持つ確率を計算で求める。

3限目

展開	学習内容・活動
導入：(5分)	条件付き確率に関する基本事項の確認
講義：(40分)	問題演習
まとめ(5分)	担当教員の講評

6. 総合的な探究の時間「夢現∞プロジェクト」

(1) 概要

SDGs の実現や Society5.0 の到来に伴って生じる課題に着目し、将来の国際社会及び日本社会における課題の発見・解決に資する知識、技能の習得と、習得した知識、技能の活用に関わる思考力、判断力、表現力を育成する。

また、自己の在り方と社会との繋がりを考えながら、社会の持続可能な発展に関わり、豊かな人生を切り拓くための学びに向う力、人間性の涵養を目指す。

なお、この取組については令和元年度から 6 年間にわたって継続して実施しており、令和 4 年度には「2022 北九州 SDGs 未来都市アワード市民部門」で SDGs 大賞、令和 5 年度には「アクションプランコンテスト」で最優秀賞、優秀賞を受賞する実績を残している。

(2) 取組内容

第 1 学年では、探究活動が本格的に始動する前の準備段階として、基礎づくりを実施する。大学教授による探究活動の目的や思考方法に関する講演会の開催、個人探究及び班別探究を通した探究スキルトレーニング、第 2 学年による研究発表会への参加・聴講を行う。

第 2 学年では、「地域や人々の抱える課題を解決するために、私たちにできること」について、主体的・協働的に探究活動を行う。6～10 名のグループで、社会の実態を学び解決策を検討するための調査、先行研究の分析、社会人(行政、大学、企業等職員等)との協議・座談会、グループ相互の意見交換、行動計画の実践、成果発表会、活動レポートの作成、外部コンテストへの出場等に取り組む。

第 3 学年では、第 1 学年・第 2 学年との交流会を実施し、「夢現∞プロジェクト」のまとめと次学年への引継ぎを行う。

以下、「夢現∞プロジェクト」のメイン学年である第 2 学年における令和 6 年度取組について、実施内容を報告する。

(3) 第 2 学年 令和 6 年度実施報告

【第 1 段階　4～5 月】

・各探究班で取り組む課題を決定し、研究計画を立てる。
・フィールドワークの実施。

◆各班取組テーマ

班	プロジェクトタイトル
1	八高生の朝食について
2	わかるをみんなに
3	わかる！できる！たのしい！自信をつけてなりたい自分に
4	シン・ボウサイ
5	八幡高校 BOUSAI 部
6	海洋ゴミ削減アクション
7	爽やかな視界拡大
8	タバコのポイ捨てを減らす方法
9	ゴミレボリューション～みんなに正しい分別とリサイクルの知識を～
10	在来種の住みやすい環境をつくる八高ビオトープネットワーク大作戦
11	地域の川を守り隊！！
12	動物愛護～幸せな犬猫を増やそう！～

班	プロジェクトタイトル
13	85 ンポスト
14	ちょっと待った！その野菜、冷凍食品にしない？
15	無くそうゼ☆再生チョークで廃棄ゼロ
16	ゴミ 0 のきれいな未来
17	We are 公園応援団！～公園の利用者数を増やそう～
18	若松の特産物をとっくさんの人に広めたい！
19	商店街に焦点を！
20	黒崎商店街活性化大作戦
21	超必見！商店街活性化プロジェクト in 若松
22	平和への理解を築く
23	色んなみんな！
24	認知症予防への第一歩
25	介護職のために

◆フィールドワーク(5 月 10 日)

一次情報に触れ、課題を自分に引き寄せることを目的とした校外フィールドワークを実施した。活動前半では、探究テーマに関連する市内の施設や団体を訪問し、施設見学や専門分野の方々との対話を通して、文献やインターネットの情報と実情とのギャップを感じる場を設定した。後半は、街中散策や公共図書館での調査活動を行い、自身の目で街の魅力や課題を発見する場を設定した。

〈生徒の感想〉

・子どもの防災の取組について、大人に全部教えてもらう受動的な防災から、能動的な防災の取組ができるような工夫やアクションプランなどを考えていきたいと思いました。子どもの視点、親の視点、地域の方の視点など色々な視点から物事を考えてよりよい発表にしていきたいと思いました。

・音楽全体の素晴らしさだけでなく合唱することの素晴らしさを深く知ることができました。このように、探究することは、色々なことを知ることができて、人生が豊かになるための行動なのだということが分かりました。また、今後は、今回知ったことを自分なりにしっかりとまとめて、足りないところは自分で調べて発表することで、周りの人の人生も豊かにしたいです。

・今回のフリー活動を通して、1 番大事だと思うコミュニケーションがたくさん取れたと思います。これまでは、班の中で、あまり話せなかったり、意見を言ったり協力したりができていなかったけど、活動を通してこれらができるようになりました。

【第 2 段階　6～10 月】

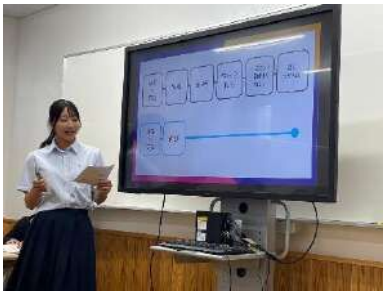
・研究計画に沿って、調査・研究を進める。

・探究ガイダンスの実施
・高校生版 CEO オーディションの開催
・課題解決に向けたアクションプランを設定・実行する。

◆探究ガイダンス(6 月 3 日/12 日)
　国公私立大学や研究機関の先生に協力いただき、対面形式・オンライン形式を併用して実施。研究内容や表現に関する指導助言を受け、研究を深める機会となった。

〈生徒の感想〉
・自分たちに必要なことや改善しなければならないこと、見つめ直すべきこと等たくさんの学びがあり、実になる良い経験になりました。今後は「活性化」の定義や人を集めることのメリット・集めないことのデメリット等、根本的なことについて班で一度考えて、しっかりと土台の整った探究にしたいと思います。
・班員だけで考えていると見えなかった客観的な部分が分かりました。「私たちは誰に向けてこのアクションプランをするのか」「ポイ捨てはゴミ箱に入れられていたら、それはもうゴミではないのか」ということを言っていただいたので、「ポイ捨てを減らすだけでいいのか」「根本となって出てくるゴミはどうすれば減らせるのか」「何をすれば人に影響を与えられるのか」という新しい課題についても考えていきたいと思いました。
・自分たちの活動を続けていくにあたって、目的を見失わないように、活動のたびに「自分たちは何をしたいのか」「なぜこの活動をするのか」ということを言葉にしながら確認することが大切であると改めて知ることができました。今後進めていく活動に当たり、それぞれが目的を見失わないようにして活動を続けていきたいです。

◆高校生版 CEO オーディション(7 月 23 日)
　一般社団法人 e-donuts 主催「高校生版 CEO オーディション」中間ピッチを本校にて開催した。書類選考を通過した 5 グループが、全国の会社経営者や地域企業、行政の方に向けて探究内容や課題解決策についてプレゼンテーションを行い、フィードバック及び実行支援を頂いた。



〈生徒の感想〉
・他の班の活動をしっかり聞くことが初めてだったので、こんな活動をしてるんだなと学びになったり、私たちの班もより頑張らなければいけないなと良い刺激になったりしました。大人の方から頂いたアドバイスや感想はとても嬉しかったし、何より自分たちがやってきたこ

とが、大人目線で見ても良い活動だと思ってもらえたのが感動しました。今までの活動は自分たち中心で行ってきましたが、これからは地域の人や全国へと広げていくための活動としてもっと視野を広くしていきたいなと感じました。

・私たちには無い大人の方々の視点で質問やアドバイスを頂けて、まだ詰めていかなければいけないことや、私たちには思いつかなかった商店街の集客の方法などの新たな気付きが多く得られたと感じました。また、数字を用いた人口減少の資料や継続的な活動など、良い点も伝えていただき、自分たちの自信にも繋がったと思いました。大人の意見を全て正しいと受け入れるのではなく、自分たちの意見を主張して、取り入れられそうなものを選ぶことも大切だということを聞いて、そういう態度をこれからの活動のなかでも大切にしたいと感じました。

【第3段階　11～1月】

・選考会、成果発表会で研究の成果を発表する。

◆選考会(11月13日)

4会場に分かれて発表会を実施。審査は、教員、1・2学年生徒、さらに本校コンソーシアム構成員及び外部協力者の方々に御協力いただき行った。選考会上位7班は、翌月開催される成果発表会ステージ発表部門への出場権を獲得した。選考会後は、各会場にてコンソーシアム構成員及び外部協力者の方より講評を頂く場を設けた。

〈生徒の感想〉

・大人や生徒の前でみんな発表できたからいい経験になりました。人前で自分たちの活動を自分の言葉で発表できたのは今後も役に立つと思います。また、他の班の発表やスライドを見て、いい所を見つけられました。成果発表会ではポスターでは、書ききれないことがあるだろうから、自分の言葉でその時に発表できるようになりたいです。

・原因の原因をもう一度班の皆で考え直し、より説得力をもって成果発表会に臨みたいです。

・座談会では来賓の方に褒めていただいたと同時に、これからの課題となることやするべき具体案を一緒に考えることができました。この貴重な意見を活かしてまたアクションプランを立て実行し、後輩にもこの活動を継続してもらえるように努力をしようと思います。

◆成果発表会(1月15日)

選考会の結果を受けて、ステージ発表部門・ポスター発表部門に分かれて発表会を実施。審査は、教員、1・2学年生徒、さらに本校コンソーシアム構成員及び外部協力者の方々に御協力いただき行った。成果発表会後は、ステージ発表部門でプレゼンを行った班と、コンソーシアム構成員及び外部協力者の方との座談会を実施し、発表内容や表現に関する指導助言を頂いた。

また、今年度は、コンソーシアム構成員及び外部協力者の方だけでなく、通学域にある中学校教員、全国の「新時代に対応した高等学校改革推進事業(普通科改革支援事業)」の指定校、本校PTAへも案内し、本校の取組のPRを行った。当日の参加者数、及び内訳は以下のとおりである。

運営指導委員	コンソーシアム	外部協力者	普通科改革支援事業指定校教員	PTA
4	6	16	6	15

ステージ発表部門の上位入賞３班は、校外で開催される「アクションプランコンテスト」への出場権を獲得し、学校代表として挑戦する。また、ポスター発表部門の上位入賞班は、近隣施設にポスターを掲示していただき、地域への活動アピールにつなげた。

〈生徒の感想〉

・座談会で頂いた色んな角度からの意見を、他のコンテストやこれからの活動に活かしていきたいと思いました。
・自分がこの活動でどのようなことを学んだのかを再確認することができました。また、この活動は持続していかなければ意味がないと思うので、日頃からどうすればそれが実現できるか意識したいと思います。

〈来場者アンケート結果〉

・どの班の発表も着眼点が面白く、PDCA サイクルに基づいて発表されていたので、とても聞きやすかったです。仮説を立てたまではいいのですが、その仮説が正しいのか、間違っているのかの検証や、実施した結果とやらなかった時との比較等、ビフォーアフターがあれば、発表内容に説得力が増すのではないかと感じました。いずれにしても高校生でこれだけのアウトプットが出せたということは素晴らしいと思います。
・年々ステージ発表の発表、課題設定、仮説の立て方、探究、成果といった一連の内容が良くなっていて、特に今年度は７班ともとても良かったです。フィールドワークの成果も出ていると思うし、仮説検証のトライ＆エラーを繰り返したり、何よりも仮説検証のために多くの企業・団体へのアプローチを試みて成果に繋げている点など、素晴らしいと思います。
・発表会場で、審査委員からのコメントを口頭で話す時間が欲しかったです。あれだけ多くの審査員が対面で来ることは貴重だと思いますので、何か一言ずつ発言できたら、場がより特別なものになったと思いました。

【第４段階　2～3 月】

・班レポート、個人レポートに研究の成果をまとめ、１年間を振り返る。

〈生徒振り返りアンケート結果〉

・将来、大学や就職した際にこの１年で行ったように課題設定やアクションプランをたてて計画的に研究や活動を行っていきたいです。また、班のみんなと研究内容について積極的に話しあったように人との意見や情報の交換を大切にしたいと思います。
・地域の方や企業の方と協力する取組を行う際はもちろん、何事にも計画と失敗の活かし方が大切になってくると思います。その中でもこれからの勉強などに「どうやって取り組んでいくのか」、「なぜ良い点数が取れなかったのか、どうして失敗したのか」などを考えるようにして次に活かしていけるようにしたいと思います。

・自分たちで考え、地域の方と交流し、課題解決に向けて行動を起こすこの活動はとてもいい経験になりました。高校生の間にこの活動ができてよかったです。
・最初はリーダーを自分がやってもよいものなのかと不安に感じることもありましたが、成果発表会を終えてやってよかったと感じています。班で最初に発言するということは自分自身初めての経験でしたが、そのおかげで、授業のグループ活動などで積極的に発言できるようになりました。次の２年生には積極的にリーダーになってもらいたいと思います。

(4) 使用資料及び生徒成果物一覧(次頁より掲載)

1　令和６年度総合的な探究の時間計画
2　夢現∞プロジェクト準備プリント
3　研究計画書(清書)
4　成果発表会冊子(一部抜粋)
5　成果発表会採点ルーブリック
6　班レポート作成上の留意点
7　班レポート作成見本
8　班レポート冊子(一部抜粋)
9　個人レポート作成上の留意点
10　個人レポート作成見本

令和6年度　総合的な探究の時間計画

※必ず毎月の授業実施計画表で確認してください。

月	日	曜	限	1年生		日	曜	限	2年生		日	曜	限	3年生
4					4	12	金	6	探究活動オリエンテーション					
	16	火	1	進路探究①		18	木	6	基礎研究・計画書作成①					
(2H)	24	水	6	進路探究②	(3H)	24	水	6	基礎研究・計画書作成②					
5	1	水	7	進路探究③	5	1	水	7	基礎研究・計画書作成③					
	8	水	7	進路探究④		8	水	7	基礎研究・計画書作成④					
	15	水	7	文化祭探究①		15	水	7	文化祭探究①					
(4H)	29	水	7	文化祭探究②	(4H)	29	水	7	文化祭探究②					
6	5	水	7	探究スキルトレーニング①	6	5	水	7	研究①					
	12	水	7	探究活動オリエンテーション（3年生との交流）		12	水	7	研究②					
(3H)	19	水	7	進路探究⑤	(3H)	19	水	7	研究③					
7	3	水	7	探究スキルトレーニング②	7	3	水	7	探究ガイダンス①／研究④					
(1H)					(2H)	12	金	3	研究④／探究ガイダンス①					
8					8									
(0H)					(0H)									
9	11	水	7	探究スキルトレーニング③	9	11	水	7	研究⑤					
(1H)					(1H)									
10	2	水	7	探究スキルトレーニング④	10	2	水	7	研究⑥					
	9	水	7	進路探究⑥										
	16	水	6	進路探究⑦		16	水	6	研究⑦					
						23	水	7	選考会準備①					
(4H)	30	水	7	同職セミ：調査・探究	(4H)	30	水	7	選考会準備②					
11	1	金	4	創立記念講演会	11	1	金	4	創立記念講演会					
	6	水	7	同職セミ：質問づくり		6	水	7	選考会リハーサル					
	13	水	5	夢現∞プロジェクト選考会		13	水	5	夢現∞プロジェクト選考会					
			6					6						
			7					7						
	20	水	7	同職セミ：リハーサル		20	水	7	成果発表会準備①					
	22	金	2	同窓会職業セミナー										
			3											
(9H)			4		(7H)	22	金	5	職業セミナー意見交換会					
12	4	水	7	探究活動スタートアップ① 課題研究スタートアップ①	12	4	水	7	成果発表会準備②					
(2H)	11	水	7	探究活動スタートアップ② 課題研究スタートアップ②	(2H)	11	水	7	成果発表会準備③					
1	8	水	7	探究ワーク①	1	8	水	7	成果発表会リハーサル					
	15	水	4	夢現∞プロジェクト成果発表会		15	水	4	夢現∞プロジェクト成果発表会					
			5					5						
			6					6						
			7					7						
	29	水	6	理数科課題研究成果発表会		29	水	6	理数科課題研究成果発表会					
(7H)			7		(7H)			7						
2	5	水	7	探究ワーク②	2	5	水	7	探究活動のまとめ①					
(2H)	19	水	7	探究ワーク③	(2H)	19	水	7	探究活動のまとめ②					
3	12	水	7	探究ワーク③（2年生との交流）	3	12	水	7	探究活動のまとめ③（1年生との交流）					
(1H)					(1H)									

1学期（～6月末）	9 時間	1学期（～6月末）	10 時間	1学期（～6月末）	時間
2学期（～11月末）	15 時間	2学期（～11月末）	14 時間	2学期（～11月末）	時間
3学期（～3月末）	12 時間	3学期（～3月末）	12 時間	3学期（～3月末）	時間
年　間	36 時間	年　間	36 時間	年　間	0 時間

夢現∞プロジェクト　準備プリント

STEP1. 班員それぞれが解決したい課題と、その課題を選んだ理由

例：まちの書店に足を運ぶ人が減っているので活性化させたい。最近、近所の本屋さんが閉業し、本や参考書を買うときは遠くまで行かなければならなくなってしまい、困っているから。

STEP2. 班で考えた解決したい課題と、その課題を選んだ理由

ポイント：「どこの」「だれが(何が)」「どのような」ことで困っているのか。自分や家族、友人の経験から考えてもよい。テレビやスマホで見聞きした情報から取り組んでみたいと感じたことでもよい。

STEP3. 理想と現状(課題)とのギャップが生まれている原因・背景は何か

ポイント：なるべくあなたに身近な原因や背景に落とし込む。
文献、インターネット、インタビューを通して調査し、事実に基づいた情報で考える。

原因【A】 → ＊根拠(情報源) ↓その原因は？ 原因【B】 → ＊根拠(情報源) ↓その原因は？ 原因【C】 → ＊根拠(情報源)	原因【D】 → ＊根拠(情報源) ↓その原因は？ 原因【E】 → ＊根拠(情報源) ↓その原因は？ 原因【F】 → ＊根拠(情報源)	原因【G】 → ＊根拠(情報源) ↓その原因は？ 原因【H】 → ＊根拠(情報源) ↓その原因は？ 原因【I】 → ＊根拠(情報源)

STEP4. 班で考えた課題が解決した状況(理想とする状況・あるべき姿)

ポイント：「どこの」「だれが(何が)」「どのような」状況になったときか。あなたの幸せにもつながりますか？

STEP5. 先行研究事例(現状分析を通して学んだことや、自分の考えをもとに対策を考えよう)

＊【原因　ＣＦＩ に対してすでに行われている対策】※3つの原因の中から1つを選ぶ

個人や学校で… (ある・ない・不明)	北九州市や福岡県で… (ある・ない・不明)	他の地域・行政で… (ある・ない・不明)	企業で… (ある・ない・不明)	海外で… (ある・ない・不明)

【あなたの班ができると思う働きかけ】※自分たちができそうなこと、誰かと一緒ならできそうなこと

個人で… 家で… 学校で…	(　　)と一緒に 例：行政と… 企業と… まちと… 大学と…

＊【原因　ＣＦＩ に対してすでに行われている対策】※3つの原因の中から1つを選ぶ

個人や学校で… (ある・ない・不明)	北九州市や福岡県で… (ある・ない・不明)	他の地域・行政で… (ある・ない・不明)	企業で… (ある・ない・不明)	海外で… (ある・ない・不明)

【あなたの班ができると思う働きかけ】※自分たちができそうなこと、誰かと一緒ならできそうなこと

個人で… 家で… 学校で…	(　　)と一緒に 例：行政と… 企業と… まちと… 大学と…

STEP6. 調査しなければならないこと・実行したいこと

調査項目・実行したいこと	調査方法・実施方法
	文献・ネット・アンケート・インタビュー・その他(　　)
	文献・ネット・アンケート・インタビュー・その他(　　)
	文献・ネット・アンケート・インタビュー・その他(　　)
	文献・ネット・アンケート・インタビュー・その他(　　)
	文献・ネット・アンケート・インタビュー・その他(　　)

【　　】班　夢現∞プロジェクト 研究計画書 (清書)

1. 班で解決に取り組む課題

2. 班で解決に取り組む課題の設定理由

3. 研究仮説

【① 問題(課題)が発生している原因は何か？調査した結果】※参考文献(出典)を明記すること。

【② 解決するためには、どうすればいいと考えるか？】

【③ ①、②をふまえ、探究活動で明らかにしたいこと】
例：〇〇で、〇〇に対して、〇〇な働きかけをすれば、〇〇が達成されるはずだ！

※文章や図、フローチャート等を使って表現すること。

4. 研究計画

(1) 調査計画

	調査項目	調査方法	責任者	期限
①				月　日( )
②				月　日( )
③				月　日( )
④				月　日( )
⑤				月　日( )

(2) アクションプラン(行動計画)

	調査項目	調査方法	責任者	期限
⑥				月　日( )
⑦				月　日( )
⑧				月　日( )
⑨				月　日( )
⑩				月　日( )

(3) スケジュール

月	総合的な探究の時間	調査計画・アクションプラン
4	オリエンテーション・研究計画書作成	
5	研究計画書作成・フィールドワーク	
6	研究	
7	探究ガイダンス・CEOオーディション	
8	各班での活動	
9	研究	
10	研究・選考会準備	
11	選考会リハーサル 夢現∞プロジェクト選考会	
12	成果発表会準備	
1	成果発表会リハーサル 夢現∞プロジェクト成果発表会	
2	探究活動のまとめ(レポート作成)	
3	探究活動のまとめ(1年生との交流)	

※(1)(2)の内容を(3)に反映させ、大まかなスケジュールが分かるようにすること。

5. 班員名簿

クラス・番号・名前	役割	備考(部活等)
組　番 名前	リーダー	
組　番 名前	サブリーダー	
組　番 名前		
組　番 名前		
組　番 名前		
組　番 名前		
組　番 名前		
組　番 名前		
組　番 名前		
組　番 名前		

※役割：リーダー・サブリーダー以外は、各班で自由に設定可。(特定の役割を決めなくてもよい)
※備考欄には、部活動など班で活動する際のスケジュール調整に必要な情報を自由に記入すること。

福岡県立八幡高等学校

令和7年1月15日(水)

夢現∞プロジェクト
成果発表会(一部抜粋)

年　　組　　番　氏名

本冊子の掲載内容（画像、文章等）の一部及び全てについて、
無断で複製、転載、転用、改変等の二次利用を固く禁じます。

目 次

1. 普通科探究活動『夢現∞プロジェクト』について
2. 本日の日程
3. 来賓一覧
4. 発表タイトル一覧
5. ポスター発表会場図
6. 各班資料

1. 普通科探究活動『夢現∞プロジェクト』について

今年度で 6 年目となる「夢現∞プロジェクト」は、「地域や人々の抱える課題を解決するために、私たちにできること」 について、八幡高校第 2 学年生徒が主体的に探究し、アクションプランを考察するプロジェクトです。

各班で設定した課題と向き合い、4 月から約 9 か月間にわたり探究活動に取り組んできました。まず、解決すべき地域や人々の課題について、文献調査やインタビュー、アンケート、フィールドワーク等をもとに学びました。その後、課題解決の方策について班内で討議し、提案・実行をしてきました。本日の成果発表会では、これまでの取組と考察、そして今後の展望について、ステージ発表、ポスター発表の形式で各班が発表します。

2. 本日の日程

12:10　開会行事
12:20　ステージ発表(6 班)
　　8分以内の発表+質疑応答 4 分
14:10　ポスター発表(19 班)
　　12 分(発表・質疑応答 10 分+移動 2 分)×3 ラウンド
15:00　全体講評・閉会行事

八幡高校BOUSAI部　5班

動機・テーマ

正しい知識、防災をみんなに

▹3つのステップを踏んで発信

Step①
災害意識の現状を把握する

Step②
災害の知識を得る

Step③
防災に関する情報を発信

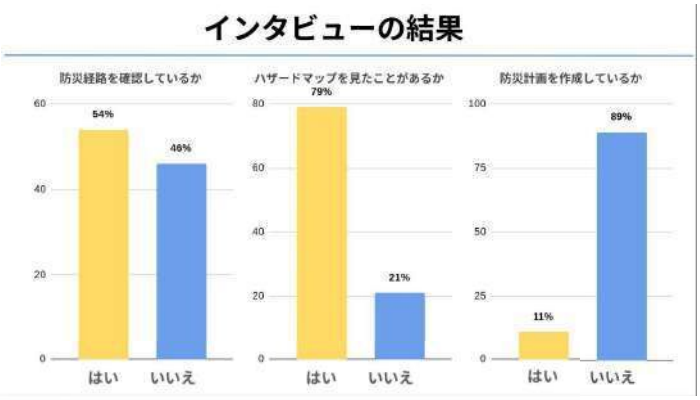
※ここでは地震について

Step①　防災に関する意識調査

主要駅で聞き込み(小倉駅、黒崎駅、折尾駅)

114人

に調査！



防災経路を確認している人 ⏫
ハザードマップを見たことある人 ⏫
それに対して …
防災計画を作成している人 ⏬
よって…
自ら進んで防災を行っている人 ⏬

『防災に対して受動的』

⇨**八高 BOUSAI部はこの状態を改善したい**

Step②　災害の知識を得る

実際に熊本に訪れて、現状を知る

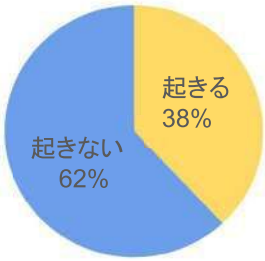
熊本地震震災ミュージアム KIOKU

地震の際に地表に現れた布田川断層

被災者の話にから、
災害は他人事ではない
ことを学んだ

実はもうひとつインタビューがあり..

Q.北九州で災害は起こるか
起きないんじゃない？
と答えた人が 62%
油断している人、被害を
軽視している人がほとんど。



⇒「この油断が命取り」

そこで私たちは…

Step③　防災に関する情報を発信

Instagramを使って学んだ知識を発信！

←**実際のリール動画**

これを見た**あなた**が
家族や**周りの人**に
共有することで
知識の共有の
サイクルができる！

@85_BOUSAI

フォローしてね！

GOMI REVO

～みんなに正しい分別とリサイクルの知識を～

福岡県立八幡高等学校
夢現∞プロジェクト9班

取り組み課題

各家庭でのゴミの分別や
リサイクルに関する知識不足の改善。

⇨課題設定理由

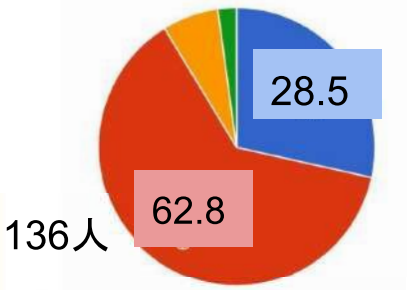
『ごみの分別の知識の勘違い』から。

現状調査

・アンケート（八幡高校生徒対象）
・資料調査（図書館）

アンケート

「あなたはごみの分別ができていますか」



- できている 28.5%
- どちらかというとできている 62.8%
- どちらかというとできていない
- できていない

Q,容器にプラマークがある商品はすべてプラスチックごみとして回収できる。

回答者137人のうち正解した人数は

37人（27%）

正しい知識を
身につける
必要がある
⇨ゲームで
楽しく学ぶ！

アクションプラン

●カードゲーム作成

カードゲームの説明

北九州市でのごみの分別をテーマとし、
40種類のゴミを、ゴミ袋に見立てた
5つのシートに分別するゲーム。

ポイント！（効果）

・ごみの分別をゲーム感覚で学べる！
・カードの裏側の豆知識によって
　学びを深められる！

今後の展望

・カードゲームの実施・改善。
・カードゲームを含めた、
　楽しいごみ分別の学び方の発信。
・多くの人に日本の現状を伝え、
　未来につなげる。

私は誰でしょう？！

ヒント1　みんな必ず一回は使った事あるし、特に今の季節は色んなところで見るよ！
ヒント2　北九州市では青の袋に入れて家庭ごみとしてゴミに出されるけど、福岡市や東京の渋谷区　　では不燃ごみとして出されるんだ！
ヒント3　使ったあとは消臭剤や除湿剤としても使えるよ！！

答え

参考文献

・ArclightGames「ボードゲームPoi」
https://arclightgames.jp/prod
・ロスゼロ「世界のリサイクル率ランキング！日本のゴミの量は多い？」
https://losszero.jp/blogs/column/news_732
・「このゴミは収集できません」滝沢秀一

福岡県立八幡高等学校 夢現∞プロジェクト[15班]

無くそうぜ☆ 再生チョークで廃棄ゼロ

取組課題

『チョーク廃棄による
二酸化炭素の排出を無くす』

設定理由

身近なところでリデュースできそうな小さいチョークや粉に注目！

今の現状(八幡高校)

◯廃棄量：約104kg
◯二酸化炭素排出量：約42kg
◯購入する量：840～1680本
◯総額：約3万～約5万円

八幡高校で作ると

一ヶ月に20本で…
➜◯一年で240本の削減
◯約4200円の節約
100%再生できたら･･･
➡二酸化炭素の排出約42kg削減

目標を達成するために･･･

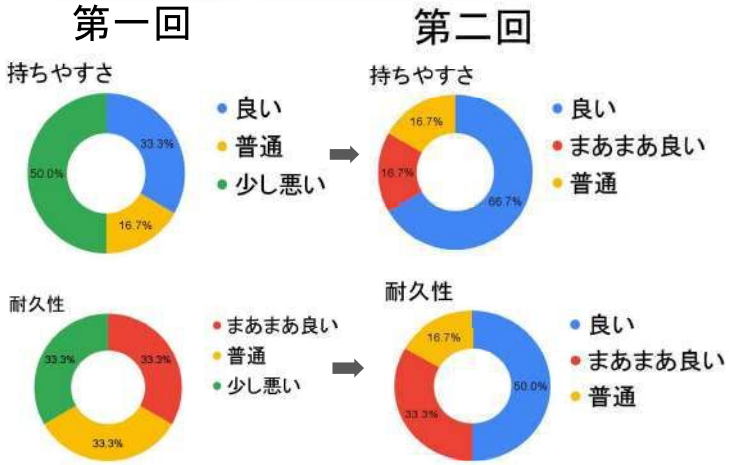
Mission1: チョークを作れ！
Mission2: 先生方に使っていただこう
Mission3: 美化委員と協力せよ
Mission4: イベントを成功させよ！

Mission1　チョークを作れ！

☆チョークの作り方
1. チョークを砕く
2. 形を作る
3. 乾かす

かかった費用は0円！
制作時間は30分程度

Mission2 先生方に使っていただこう

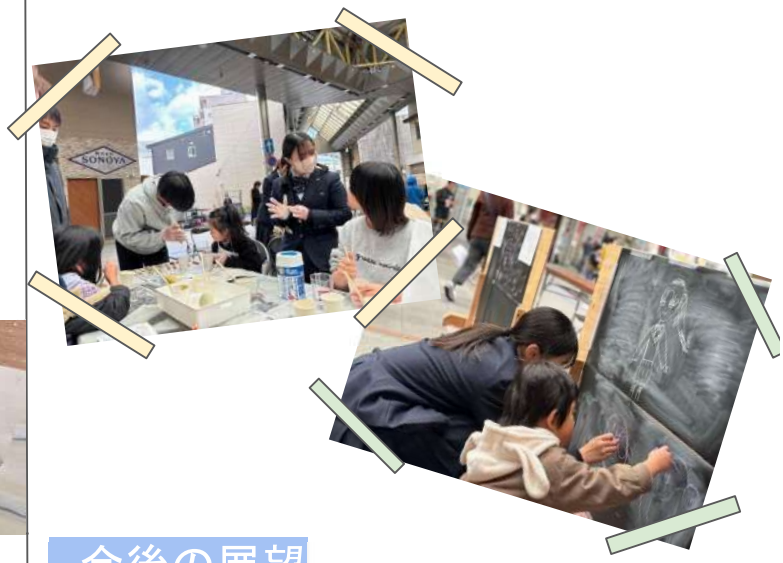


Mission3 美化委員会と協力せよ

総人数：15人ほど
合計15本を予想の半分の時間で！

Mission4 イベントを成功させよ！

参加人数：30～40人ほど
場所：中央町商店街
活動：チョーク作り体験、
お絵かきコーナーの設置



今後の展望

再生チョークを作る取り組みを習慣化
⬇️
八高のチョークを全て再生チョークに

参考文献

チョークの成分と書き味について
https://www.youtube.com/watch?v=aRnQibJHkt4
簡単にできる自由研究 8 チョークもリサイクルできる？YouTube・まる塾
https://www.youtube.com/watch?v=aRnQibJHkt4
環境省「温室効果ガス排出量の算定・報告・公表制度」
https://www.env.go.jp/earth/ondanka/suishin_g/04_2.pdf

採点者(生徒用)　　年　　組　　番　氏名　　(　　班)

福岡県立八幡高校『夢現∞プロジェクト』成果発表会　採点表(ステージ発表用)

評価項目 得点	① 課題の設定	② 情報の収集・蓄積	③ 整理・分析・まとめ	④ 表現
５点	課題設定とその理由が明確であり、当事者意識をもった上で解決に向けて仮説を立て、研究を進めている。	課題解決に必要な情報を、目的に応じた手段を選択して収集・蓄積し、根拠のあるデータとして提示している。	得られた情報を正確に分析し、課題解決に有効なアクションプランを提示した上で、その考察と今後の展望について述べている。	適切な図表等を用いてスライドを作成し、研究内容を論理的に説明している。質問の内容を理解し、適切に受け答えしている。
４点	課題設定とその理由が明確であり、解決に向けて仮説を立て、研究を進めている。	課題解決に必要な情報を、目的に応じた手段を選択して収集・蓄積し、データとして提示している。	得られた情報を分析し、アクションプランを提示した上で、その考察と今後の展望について述べている。	図表等を用いてスライドを作成し、研究内容を論理的に説明している。質問の内容を理解し、受け答えしている。
３点	課題設定が明確であり、解決に向けて仮説を立て、研究を進めている。	課題解決に必要な情報を収集・蓄積し、データとして提示している。	得られた情報を分析し、アクションプランを提示している。	図表等を用いてスライドを作成し、研究内容を説明している。質問に対して受け答えしている。
２点	課題設定が明確であり、解決に向けて研究を進めている。	情報を収集・蓄積し、データとして提示している。	アクションプランを提示している。	図表等を用いてスライドを作成し、研究内容を説明している。質問に対して受け答えしようと努力している。
八高 オクタゴン	② 課題発見力 ④ 論理的思考力 ⑧ 自己肯定力	① 情報収集力 ⑧ 自己肯定力	④ 論理的思考力 ⑥ 実行力 ⑧ 自己肯定力	⑤ 連携力 ⑦ 表現・発信力 ⑧ 自己肯定力

☆注意事項⇒　①各班で可能な限り得点に差をつけてください。　②各項目は 0.5 刻みで採点しても構いませんが、合計得点は整数で記入してください。

発表順	発表班・タイトル	① 課題の設定	② 情報の収集・蓄積	③ 整理・分析・まとめ	④ 表現	合計得点
1	６班　海洋ゴミ削減アクション	５　４　３　２	５　４　３　２	５　４　３　２	５　４　３　２	／２０
2	13 班　85 ンポスト	５　４　３　２	５　４　３　２	５　４　３　２	５　４　３　２	／２０
3	４班　シン・ボウサイ	５　４　３　２	５　４　３　２	５　４　３　２	５　４　３　２	／２０
4	３班　わかる！できる！たのしい！ 自信をつけてなりたい自分に	５　４　３　２	５　４　３　２	５　４　３　２	５　４　３　２	／２０
5	14 班　ちょっと待った！ その野菜、冷凍食品にしない？	５　４　３　２	５　４　３　２	５　４　３　２	５　４　３　２	／２０
6	23 班　色んなみんな！	５　４　３　２	５　４　３　２	５　４　３　２	５　４　３　２	／２０

２年　　組　　番　氏名　　（　　班）

『夢現∞プロジェクト班レポート』作成上の留意点【提出期限：2/19（水）】

1.『夢現∞プロジェクト班レポート』作成の目的

〇探究活動の実績をレポート形式で残す

▸自分たちの実績を形として残し、校内外に公表する。また、後輩に対しての先行研究の見本となる。

〇社会課題に対する自分たちの考えを分かりやすくまとめるトレーニングを行う

▸大学入学後のレポート作成を視野に入れ、分かりやすく説得力のある書き方について知り、考え、文書作成を行う。

2.『夢現∞プロジェクト班レポート』作成のポイント

〇調べたことについてまとめると同時に、それらに対しての考察を加える

▸調査・研究内容や結果について列挙するのみでは不十分である。**自分たちがどういう課題意識を持って探究活動に取り組んだか、またその結果を受けて今後残された課題についてどのように考えるか**、をレポートに含めること。

〇課題やその解決につながる情報をまとめる

▸集めた情報は、レポートの最後に参考文献としてまとめること。

3.『夢現∞プロジェクト班レポート』の構成

▸文体は「～である」調で統一する。　▸レポートの章立ては統一する。

研究テーマ	成果発表会で使用した研究テーマ（発表タイトル）を記入する。
1.はじめに	現状に対する課題意識と、この研究テーマを選ぶに至った経緯について記述する。 「どのような課題に」「なぜ取り組むのか」等を書き、読者を本論に誘導する。
2.研究方法	課題の現状について学び、その解決に向けての方策を探るために行った調査・研究等を記述する。 <書き方例> （1）文献調査：「平成 28 年度食料農業農村白書」（農林水産省）で・・・に関する調査を行う。 （2）アンケート調査：〇の・・に対する意識を調査するため、□を対象にアンケートを実施する。 （3）インタビュー調査：・・・について調査をするため、〇へインタビューを実施する。　など
3.結果・考察	① 3.で挙げた調査・研究等の結果を記述する。 作成した発表資料や、調査内容のまとめを参照するとよい。図・グラフなどを挿入してもよい。 <書き方例> 「『令和 4 年度〇〇白書』（農林水産省）によれば、農業従事者は図1のように減少している。」 「アンケート調査の結果・・・ということがわかった。」「インタビューの結果・・・ということがわかった。」 「この問題に対して〇〇市では・・・のような取組をしている。」 ② ①の結果をどう捉え、どのような解決策（アクションプラン）を導き出したのかを記述する。 ⇒**なぜその解決策（アクションプラン）が有効だと考えるのか、根拠を示し論理的に述べる。** <書き方例> 「以上のことから、…ということがわかる。よって、私たちは…と考え、…という解決策を提案する。」 ③ 解決策（アクションプラン）実行後の結果（成果）について記述する。
4.今後の課題	調査・研究および提案・実行した解決策（アクションプラン）について、残された課題を記述する。 次年度の研究者が追研究をする際に参考となる事項にふれるとよい。 <書き方例>「…するためには、さらに…する必要がある。」 「今回の研究では…することができなかった。今後は…を行っていきたい。」
5.感想	探究活動を通して、どのような知識を身につけ、どのような力を伸ばすことができたかを記述する。 困難を克服した経験など、具体的なエピソードを交えて記述するとよい。
6.新２年生に引き継ぎたい研究	新 2 年生に引き継いでほしい調査・研究やアクションプランがある場合はここに記述する。 （特にない場合は記入不要）
参考文献	調査・研究の際に使用した文献やウェブサイト等のリストを作成する。 **※書籍・論文等の場合⇒①著者名・媒体名 ②タイトル ③発行年（西暦）** **※ウェブ上の公開データの場合⇒①著者名・媒体名 ②タイトル ③発行年（西暦） ④URL**

第２学年　夢現∞プロジェクト班レポート（←12pt.・左寄せ）

班レポート作成見本

（一行空ける）

研究テーマ（←**14pt.・太字・センタリング**）

（一行空ける）

〇〇班　〇〇〇〇・△△△△・□□□□…（班員全員の氏名を入力）（←**11pt.・右寄せ**）

（一行空ける）

1　はじめに（←**12pt.・太字**）

※Google ドキュメントを使用して文書を作成する。　Google Classroom → ドキュメント → 空白

※**A４用紙２枚程度にまとめる。(２枚目の半分以上)**

※**書式設定は初期設定値を利用する。（フォント：Arial／フォントサイズ：11pt.／余白：上下左右 2.54）**

※タイトル・サブタイトル等フォントサイズ指定箇所以外の**本文フォントサイズは 11（初期設定値）で入力**する。

※句読点は「、」「。」で統一する。

※文章作成の基本ルールは、原稿用紙の書き方と同じ。

※段落わけをする。段落が変わるときは１マス下げる。

2　研究方法

3　結果・考察

4　今後の課題

5　感想

6　新２年生に引き継ぎたい研究

※この項目については、引き継いでほしい調査・研究やアクションプランがある場合のみ記入する。

＜参考文献＞（←11pt.・太字）

※参考文献のフォントサイズは９pt.で入力する。

福岡県立八幡高等学校

令和7年3月10日 発行

夢現∞プロジェクト
第78期 班レポート
(一部抜粋)

本冊子の掲載内容（画像、文章等）の一部及び全てについて、
無断で複製、転載、転用、改変等の二次利用を固く禁じます。

第２学年　夢現∞プロジェクト班レポート

わかる！できる！たのしい！自信をつけてなりたい自分に

3班

１　はじめに

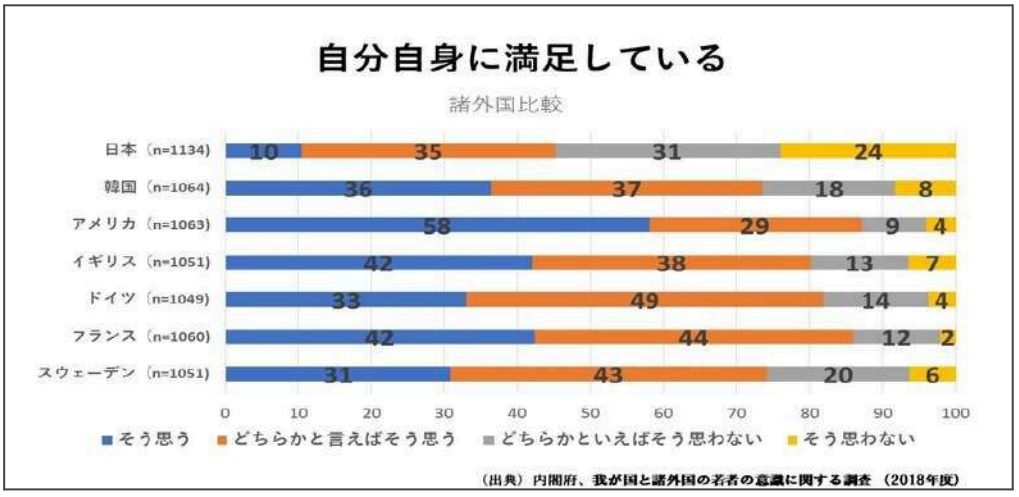
現在、「教育問題」は世界的な課題となっている。先進国と言われる日本も、「いじめ」や「不登校児童の増加」など様々な課題を抱えている。なぜこのような教育問題が起こるのか原因を考えた結果、「子どもたちの自己肯定感の低下」が根底にあるのではという仮説に行きついた。そこで私たちは「子どもたちの自己肯定感向上」を目標に研究に取り組むことにした。

２　研究方法

（1）八幡高校の生徒に、自分自身に満足しているかどうかについてのアンケートを取る。
（2）班員全員がボランティア講師に登録する。
（3）無料塾（フードバンク北九州ライフアゲイン様）や学童に行き、直接子どもたちと関わる。
（4）無料自習室についてのポスターを作成し、近隣の学校（槻田小学校、槻田中学校、祝町小学校）に配布する。

３　結果・考察

下図の「内閣府　我が国と諸外国の若者の意識に関する調査」において、「自分自身に満足しているか」という質問の国別調査によると、日本は他国に比べて自分自身に満足している人が少ないことが読み取れる。



八幡高校で「自分に満足しているか」というアンケートをとったところ、64%の人が「自分に満足している」と回答した。国別調査の日本で「自分に満足している」と回答した人は45%だったので、日本国内と比較すると八幡高校の割合は高いが、アメリカや韓国などの他国と比べるとまだまだ割合が低い。これらの調査をとおして、現代の日本で自己肯定感の低い子どもが年々増加している原因は、褒められた経験が少ないことや自分を否定された経験が多いことが影響しているのではないかと、私たちは考えた。

そこで私たちは、「自分を大切に思う心と相手を大切に思う心のサイクル」を自己肯定感とし、子どもたちを褒め認めることは、子どもたちの自己肯定感の向上を達成することにつながると考えた。そして子どもたちの自己肯定感の向上を目標に、学童保育の訪問と無料塾

への講師ボランティア参加というアクションプランを提案する。自己肯定感の短期間での変化を調べるために学童保育を、長期間での変化を調べるために無料塾を選んだ。

学童保育では子どもたちと直接関わることで視野・活動の幅を広げることができたが、自己肯定感の変化は汲み取ることができず、直接的な問題解決には繋がらなかった。

無料塾ではボランティア講師の募集・引き継ぎを行い、認知拡大を目指して活動している。募集期間と実際のボランティア参加者は下記の通りである。

・1次募集：2024年7月27日～10月26日
・2次募集：2024年11月14日～11月29日
・体験応募者数：20名
・正式登録者数：15名

また、八幡高校生だけでは高校の行事などで予定が入ると講師不足に陥ってしまうため、近隣の東筑高校、自由ケ丘高校、小倉高校へも説明会を実施し、ボランティアの募集拡大を行った。

この活動が広がると、子どもたちにとっては「相談場所と居場所が増える」「年齢が近い高校生だから相談できる」などの効果が挙げられ、またボランティア活動者にとっては「活動者自身の居場所になる」「他校の高校生や大学生との交流ができる」などの効果が挙げられる。

4　今後の課題

今回の活動では無料塾を利用する子どもたちや八幡高校生を対象に、google form のアンケート調査を行ったが、自己肯定感が向上したかどうかの測定方法は確立できなかった。また、この活動を子どもたちに広く知ってもらうことがあまりできなかった。無料自習室については近隣の小中学校にポスターを配布したため認知してもらえているとは思うが、まだ配布できていない学校も存在する。成果発表会で質問もあったが、今後、認知の拡大方法も考える必要があると思った。

5　感想

この探究活動を通し、私たちは「自己肯定感の向上」という課題には、様々な企業やボランティアグループが取り組んでいることや、この課題へのアプローチ方法が多数存在することを知った。しかし、このどれもが微量な力であり、課題解決は長い道のりであることに気づいた。そのため、私たちはこの課題の要である「継続」を実現するためにディスカッションを重ねた。その過程で、班員はそれぞれが自分の役割を自覚し、それぞれの立場から意見を言うことができるようになった。例えば、原稿づくりを行った班員とスライド作りを行った班員が互いに意見を出し合い、原稿とスライドの不一致のない、正確で、見る人に伝わりやすいものになるよう心がけた。この活動を活かして、これから待ち構える様々な難題にも挑戦していきたい。

6　新２年生に引き継ぎたい研究

無料塾を継続するために、八幡高校が主となって他校や後輩を引っ張るための体制構築。

＜参考文献＞

・「自己肯定感」が低い原因5選　再春館製薬所
http://www.saishunkan.co.jp
・外国人に比べ日本人が自己肯定感が低いのはなぜか？
https://www.iot-makers.co.jp/blog/column/851/

第２学年　夢現∞プロジェクト班レポート

海洋ゴミ削減アクション

6班

１　はじめに

私たちの最終的な目標は、海岸に打ち上げられたゴミの量を減らすことだ。その中でも、漁具のゴミを減らすことを第一目標としている。理由としては、海岸清掃を行った際に、プラスチックの次に漁具のゴミが多く見られたからだ。プラスチックゴミは現在、世界中で注目されており様々な対策が行われているが、漁具のゴミについては、プラスチックゴミほど対策が取られていないと感じたので着目している。私たちの活動が実現されれば、漁具のゴミに対して漁師の方を含む世の中の意識も高まり、海洋ゴミ全体の量の減少にもつながるのではないかと考えている。

２　研究方法

１、海岸のゴミの現状について知るために芦屋海浜公園を海岸清掃する。
２、竹を牡蠣パイプに利用できるのかを知るために九州工業大学様にインタビューをする。

↑牡蠣パイプ(プラスチック)

↑牡蠣パイプ(竹)

３、牡蠣パイプを他の素材で作れないかを知るために実際に生分解性プラスチックで漁具を制作しているi-compology株式会社様にインタビューする。
４、プラスチックの代わりに竹を使用する際、竹の伐採方法などを知るために竹の伐採業者である美緑屋様にインタビューする。
５、牡蠣のパイプを竹に変えることを普及している竹の駅あきたかた様にインタビューする。
６、プラスチック製の牡蠣パイプを使用している方に、その理由をお聞きするために豊前海一粒かき様にインタビューする。
７、緩衝材を開発し普及するために、千葉県の森幸漁網株式会社様にビジネスプランを提案する。
８、緩衝材を開発し普及するために、山口県の日東製網株式会社様にビジネスプランを提案する。

３　結果・考察

１で分かったことは、プラスチック類が一番多く、その次に漁具が多いことだ。漁具の中でも特に牡蠣パイプとフロートが多く、そのためこの2つのゴミを減らそうと考えた。

まず牡蠣パイプに焦点を当てた。牡蠣パイプの素材を竹から生分解性プラスチックに変えることはできないかと考え、２と３を行った。その結果、竹に変えることはできそうだが、

生分解性プラスチックは高校生が扱える素材ではないと言われ、実現が難しいということが分かり、私たちは次のプランとして竹を使うことを考えた。

竹で牡蠣パイプを作る際、竹をどこから入手できるのか調べるために４を行い、伐採した竹を無料で提供していただけるということになった。そして実際にプラスチック牡蠣パイプ、竹の牡蠣パイプ、それぞれのメリット・デメリットを知るために５・６を行った。プラスチックのメリットはコストが安いこと、デメリットは環境に悪いことである。竹のメリットは環境に優しいこと、身の詰まった栄養分の高い牡蠣ができること、デメリットはコストが高いことである。これらのことから、コストを抑えることができれば竹での代用ができるのではないかと考えた。しかし、牡蠣パイプに適しているのは篠竹であり、篠竹は水辺の周りにしか生えておらず、伐採するには許可を取らなければならないこと、伐採した竹を山から海へ運搬するための費用が高いことなどの様々な問題が積み重なり、牡蠣パイプを竹に変えるアイデアは断念することとなった。

その後、視点を変えて、漁具のゴミの中でも牡蠣パイプの次に多かったフロートに着目した。豊前海の牡蠣養殖業者の方を訪問した際、右図のように、フロートが筏と直接ぶつかるためにすぐ壊れるという問題点を教えていただき、この問題を解決していこうと考え、筏とフロートの間に挟む緩衝材を製作するというアイデアを思いついた。

緩衝材を使用することで、耐用年数が今の２倍は増えると予測されること、フロートを買い直すお金が減り、牡蠣養殖が盛んな広島での導入ができれば17億円の買い替え費用が削減できる可能性があること、海洋ゴミが減ることなどの利点がある。

この緩衝材(右図)を普及させるために、７・８を行った。７では、地理的に距離があるため、共同製作は難しいと言われたが、私たちのアイデアを肯定していただき、８の企業を紹介していただいた。８では製作費や人件費、売値などの販売面でのアドバイスを頂いた。緩衝材を普及するための活動は現在も継続中である。

４　今後の課題

緩衝材を取り入れることで5年から10年持つようになる具体的な根拠を数値として出すことが今後の課題である。また、筏と浮きの間に挟む緩衝材の試作品を実際に試し、企業と協力してその作品の製品化、大量生産、販売を行うことも課題である。それをするためには、試作品を試す方法を決め、私たちの考えているアクションプランに賛同してくださる企業を探すことが必要である。そして、私たちが関わらなくてもその製品を生産し、サイクルが回るようにすることも課題である。今回の研究では、緩衝材を製品化し、広島などの牡蠣養殖を行っているところへ緩衝材を普及することができなかった。今後は、作成した試作品を実際に使用して反省点をまとめ、改善していきたい。

5　感想

この探究活動を通して、私たちが成長した点は、自ら課題を見つけ、それに対して主体的に調査・分析する力が身についたことだ。当初は何をテーマにするべきか迷い、情報収集も手探りだったが、調べを進める中で漁具のゴミの量を減らすという目的が明確になり、課題を整理するスキルが向上した。また、探究を進める過程で、調べていたことが白紙に戻り１からやり直すという経験や、人件費や運搬費などのコストが想像以上で思い通りにいかず、自分たちの考えの甘さを実感することもあったが、そのたびに原因を考え、改善するプロセスを繰り返すことで、課題解決能力が鍛えられたと感じている。さらに、先生方をはじめ、インタビューを行った専門家や企業の方々と意見交換をする中で、自分の考えを分かりやすく伝える重要性に気づき、コミュニケーション能力も向上した。

一方で、調査を通じて、自分の知識や視点の偏りを自覚し、自分たちだけでなく、製作者や購入する側の視点も考えることで、より広い視野を持ち、新しい視点を取り入れる柔軟性が大切だと気づいた。これらの経験を通じて、課題解決に向けた努力の重要性とともに、学び続ける姿勢の必要性を改めて実感した。

＜お世話になった方々・参考文献＞

・九州工業大学様
・i-Compology株式会社様
・美緑屋様
・竹の駅あきたかた様
・豊前海一粒かき様
・森幸漁網株式会社様
・日東製網株式会社様
・Product for the Blue
https://www.allianceforthebblue.org/pfb/

第２学年　夢現∞プロジェクト班レポート

８５ンポスト

13班

１　はじめに

私たちはまず大きな課題として「食品ロス」を挙げ、自分たちにできることを考えた。その結果、「食の大切さを理解し、食べ物を無駄にしない」ということをテーマに研究を進めることに決定した。そこで「食品ロス」の中で最も多い過剰除去が身近にあるかを調べたところ、学校の食堂では、生ゴミが毎日１キロ出ているということが分かった。そして私たちは、これを削減するために「コンポスト」を利用して生ゴミ削減に取り組むことに決めた。また、「過剰除去」や「コンポスト」についての人々の認知度が低いことから、このコンポストを通して自分たちの活動を広めていこうと考えた。

２　研究方法

①コンポストについて詳しく知るために、北九州市コンポストアドバイザーの会の方の講習を受講する。
②北九州市コンポストアドバイザーの方にご指導いただきながら2つのコンポストを作製し、平日の食堂の生ゴミを回収しコンポストの肥料成分にする。(7月～12月)
③数ヶ月ごとにアドバイザーの方々にコンポストの現状を見てもらい、改善を進める。
④食堂の生ゴミの処分状況を調査するため、食堂の方にインタビューをする。

３　結果・考察

事前の調査では、農林水産省「食品ロス統計調査・世帯調査（平成26年度）」によると、家庭内における食品ロスで１番割合が大きいのは「過剰除去」であることが分かった。しかしながら、消費者庁「食品ロスの現状と削減に向けた取り組み第1部第2章第2節 （2016）」によると、人々が食品ロスとして思い当たるもので最も割合が小さいものも「過剰除去」であった。このことから、過剰除去は食品ロスにおいて占める割合が大きいにも関わらず、人々の認知度が低いということが分かった。よく考えてみると、食べ残しや直接廃棄に対する既存の解決策は思い当たるものがたくさんあるが、過剰除去に対する解決策はあまり浮かばない。そこで私たちは、八幡高校の中で過剰除去を含むすべての食品ロスが集まる生ゴミに対処できるアクションプランを実行し、それを広めていこうと考えた。

2024年7月に北九州市コンポストアドバイザーの会の方々にご来校いただき、コンポスト作りの方法を教えていただいた。そこから2学期終了まで、食堂の生ゴミを対象にコンポストの活動に取り組んだ。コンポストアドバイザーの方々にも度々ご来校いただき、フォローアップ研修を行っていただいた。その結果、八幡高校の食堂からでる生ゴミはほぼゼロになった。このことから、コンポストは非常に有用なアクションプランであるといえる。

さらに、この活動を広く普及することが食品ロス問題の解決につながると考え、コンポストを身近に体験できる自由研究セットの試作品を作成した。小中学生とその保護者を対象としており、野菜や花を育てることで食の大切さや農業の楽しさを伝えることができると考え、継続して改良を重ねていきたい。

４　今後の課題

今回の探究活動では、実際にコンポストを用いて食堂の生ゴミを数ヶ月で50キログラムなくすことができた。しかし、自由研究セットの作製が上手くいかず、完成形を作ることが

できなかった。またコンポストの作り方などを紹介している動画も見てもらう機会が少なかったため、小学生を主とした多くの地域の人たちに伝えることができなかった。

このことから今後の活動として、まずはコンポストの自由研究セットを完成させ、多くの人にコンポストの存在や「食品ロス」の中の過剰除去を減らすことに対して関心をもってもらいたいと考えている。

5　感想

私たちは当初、無料塾の子どもたちへ提供するための野菜の栽培を行っていた。残念ながら気候条件や管理状況などの問題により成功とはならなかったが、その後すぐに新たなアクションプランについて考えをまとめることができた。

また、毎回の探究の時間ではリーダーを中心に班員が様々な視点や自身の経験から意見を出し、話し合いが円滑に進んだと思う。また、スライドや発表の仕方など、班員それぞれの得意なことを活かして工夫して行った結果、成果発表会のステージ発表部門にも進むことができた。成果発表会では、選考会よりもさらに内容を深めたり、実際の道具を揃えたり、スライドをより良いものに改善したり、聞いてくれる方へ訴えかけられるような発表の仕方を考えたりなど改善を行った。本番ではそれぞれの役目を全うし1位を取ることができた。さらに、私たちは4つの外部コンテストに出場し、少しでも多くの人にコンポストの活動を広められたと感じている。

この活動を通して「食の大切さを理解し、食べ物を、無駄にしないこと」というテーマの解決策について実行することができ、継続して班員で分担しコンポストに取り組むことで、続けることの大切さも実感することができた。また、自分の考えを共有し、より考えを深める力もついた。

6　新２年生に引き継ぎたい研究

①コンポストを引き継ぎ、これからも食堂の生ゴミゼロを続ける。
②小学生に限らず多くの人にコンポストの自由研究セットを広める。
③学校外にもコンポストを広める活動を検討する。
④コンポストで得た肥料の活用方法を検討する。

＜参考文献＞

・①rkb ②生ごみ→堆肥→家庭菜園パリで広がる「コンポスト」開発したのは福岡の企業難民の就労支援にも ③2024 ④https://newsdig.tbs.co.jp › articles › rkb
・①消費者庁 ②第1部第2章第2節(4)食品ロスの現状と削減に向けた取り組み ③2016　④https://www.caa.go.j
・①北九州市 ②生ごみリサイクル講座 ③2024 ④https://www.city.kitakyushu.lg.jp › contents
・①神奈川県愛川町　②家庭から食品ロスをなくそう ③2024　④https://www.town.aikawa.kanagawa.jp
・①日本財団ジャーナル ②世界では十分な食べ物を得られずに苦しむ人が増えている？　③2024 ④https://www.nippon-foundation.or.jp › journal

２　年　　組　　番　氏名　　（　　班）

『夢現∞プロジェクト個人レポート』作成上の留意点【提出期限：2/26(水)】

1.『夢現∞プロジェクト個人レポート』作成の目的

この個人レポートは、**あなたが『夢現∞プロジェクト』を通じて取り組んできた社会課題への関心と、これまでの活動を通じて得た知識や経験、そして伸ばしてきた力について外部にアピールすることを目的**として、あなた自身の言葉でまとめるものです。

個人レポートの様式は、**九州工業大学・大分大学・関西学院大学等の総合型選抜提出書類をもとに作成しており、来年度の総合型選抜や学校推薦型選抜等におけるあなたの書類作成に活用できる**ようになっています。また、このレポートは、**来年度の担任の先生方が調査書および推薦書を作成する際の参考書類**となります。

進路希望調査において、現時点での志望校を挙げていることと思います。**可能な限り志望校での学びと関連付けながら**、365日後の自分自身のために、心して個人レポート作成に取り組んでください。

2.『夢現∞プロジェクト個人レポート』作成のポイント

〇調べたことについてまとめると同時に、それらに対しての考察を加える

▸調査・研究内容や結果について列挙するのみでは不十分である。**自分がどういう問題意識を持ってその探究活動に取り組み、行動し、結果を受けて今後の課題についてさらにどのように考えるか**をレポートに含めること。

〇探究活動における自身の役割とその活動内容をまとめる

▸自分が果たした役割や活動内容、そこから得た知識や力などについて、**具体的なエピソードを含めて**記述する。

3.『夢現∞プロジェクト個人レポート』の構成

▸文体は「～である」調で統一する。　▸レポートの章立ては統一する。

0.レポートデータタイトル	**まず、データ名を、以下の例の通り変更してください。** **例）2 年 3 組 40 番 溝井 の場合（全て半角英数で入力。␣は半角スペース。）** **⇒2340␣MIZOI**
1.探究活動のテーマ	成果発表会で使用した研究テーマ（発表タイトル）を記入する。
2.テーマ設定の理由 （テーマ設定に至った背景）	現状の課題意識と、この研究テーマを選ぶに至った経緯について記述する。 「どのような課題に」「なぜ取り組むのか」等を記述する。
3.探究活動の成果に関する概要	『夢現∞プロジェクト』での取組について、以下の項目に分けて記述する。 （1）調査・研究 文献調査・アンケート調査・インタビュー調査など、アクションプランを設定するためにどのような調査・研究を行ったか （2）解決策の提案・実行 どのような目的・方法でアクションプランを計画・実行したか （3）結果・考察 アクションプランの結果（成果）とそこから導き出された考察と今後の展望
4.探究活動における個人の成果	探究活動の各段階におけるあなたの役割と活動内容、またそれらを通じてどのような知識を身につけ、どのような力を伸ばすことができたかについて、具体的に記述する。 （1）調査・研究 （2）解決策の提案・実行 （3）結果・考察（選考会・成果発表会・レポート作成）
5.探究活動を活かした今後の目標や将来の夢	探究活動を活かした今後の目標や将来の夢について、現在の第一志望校での学びと関連付けて記述する。

第２学年　夢現∞プロジェクト個人レポート（←12pt.・左寄せ）

個人レポート作成見本

（一行空ける）

２年〇組〇〇番　〇〇〇〇（〇〇班）（←**14pt.・太字・センタリング**）

（一行空ける）

1　探究活動のテーマ　（←**12pt.・太字**）

※Google ドキュメントを使用して文書を作成する。　Google Classroom → ドキュメント → 空白
※**A４用紙２枚程度にまとめる。(２枚目の半分以上)**
※**書式設定は初期設定値を利用する。（フォント：Arial／フォントサイズ：11pt.／余白：上下左右 2.54）**
※タイトル・サブタイトル等フォントサイズ指定箇所以外の**本文フォントサイズは 11（初期設定値）で入力**する。
※句読点は「、」「。」で統一する。
※文章作成の基本ルールは、原稿用紙の書き方と同じ。
※段落わけをする。段落が変わるときは１マス下げる。

2　テーマ設定の理由

3　探究活動の成果に関する概要

（１）調査・研究

（２）解決策の提案・実行

（３）結果・考察

4　探究活動における個人の成果

（１）調査・研究

（２）解決策の提案・実行

（３）結果・考察（選考会・成果発表会・レポート作成）

5　探究活動を活かした今後の目標や将来の夢

7. 会議議事録(事業説明会、高校 CN オンライン研修 5 回)

(1) 令和 6 年度 高校 CN 全国プラットフォーム構築事業説明会

タイトル：本年度の事業説明
実施形態：Zoom Meeting によるオンライン開催
日　　時：令和 6 年 5 月 16 日(木) 15:00～15:45
主 催 者：三菱 UFJ リサーチ&コンサルティング、一般財団法人 地域・教育魅力化プラットフォーム、文部科学省
参 加 者：廣濱、平田、松永、大塚、應地、藤岡、真子

～説明会内容～

1. 事業全体概要及びスケジュールについて【MURC　喜多下氏】
   - 本事業の目的
     ①CN が持続的に活躍できるように CN や学校関係者を支援すること。
     ②成果指標の検証による PDCA サイクルの構築。
   - 事業内容の柱
     ①CN 研修エコシステム研究会
     ②全国フォーラム
     ③PDCA サイクルの構築
   - 年度内に対面研修(3 回)、オンライン研修(5 回)、全国フォーラム(1 回)を実施する。

2. 本年度の CN 研修会について【地域・教育魅力化プラットフォーム　岡崎氏】
   - 開催目的
     ①高校 CN の基本的な資質能力(レディネス)習得　　②高校 CN コミュニティの形成
   - 継続、退会の申請：5/24(金)まで
   - 年度内に対面研修(3 回)、オンライン研修(5 回)への参加を推奨する。
   - 事前学習、研修、事後課題を実施する。

3. PDCA サイクルの構築に係る各種調査への協力依頼について【MURC　永野氏】
   - PDCA サイクル構築の柱
     ①アウトカム評価(成果と結果の評価→高校魅力化評価システムの実施)
     ②プロセス評価(現状と過程の把握→ロジックモデルの振り返りと自己評価の実施)
     ③指定校ヒアリング(CN と学校の在り方の情報収集→6～8 月に訪問)
   - 6～8 月：指定校ヒアリング、高校魅力化評価システムアンケート実施
     10 月：PDCA サイクルに係る研修・説明会
   - 3 年間の情報交換や研修を通して、「高校 CN の手引き」を作成する。

4. 「高校魅力化評価システム」の実施について【MURC　喜多下氏】
   - 「学校の教育活動、及び生徒の資質・能力の伸びを見える化する」組織診断ツールを通して、学校で活用できる情報の提供を行う。
   - 学習環境や生徒の意識、資質・能力の変容を測る調査項目
     ①学習活動 ②学習環境 ③能力認識 ④行動実態 ⑤ウェルビーイング
   - 6 月上旬：実施希望の有無の調査とアカウントの発行
     8 月末まで：生徒及び教職員・大人へのアンケート実施
     10 月以降：結果読み取り方法の共有
   - 学校独自のアンケート項目の登録も可能
   - マニュアルの配布、6 月以降に問い合わせ窓口の設置(後日通知)

(2) 令和６年度 高校CN研修説明会

タイトル：本年度の研修説明
実施形態：Zoom Meetingによるオンライン開催
日　　時：令和６年５月16日(木) 15:45～16:30
主 催 者：一般財団法人 地域・教育魅力化プラットフォーム、三菱UFJリサーチ＆コンサルティング、文部科学省
参 加 者：真子(普通科改革支援コーディネーター)

～説明会内容～【地域・教育魅力化プラットフォーム　岡崎氏】
1. 研修目的
①高校CNの基本的な資質能力(レディネス)習得
②高校CNコミュニティ(自主ゼミ)の形成

2. 研修内容の策定プロセス
・研修用ルーブリックを軸に、「職務要件(令和４年度)」、「資質能力(令和５年度)」を策定した。今年度は、これらをもとに「高校CNの手引き」の完成につながる研修を策定する。

3. 昨年度の内容
・全研修において共通のグランドルール
①対話のキホン：Yes, and
②改革のキホン：できない理由よりできる条件を！
③学びのキホン：アンラーン
・対面研修では「経験学習と対話」を中心に、オンライン研修では「知識習得と概念整理」を中心に、全８回の研修を実施した。

4. 今年度の概要
・昨年度に引き続き、対面研修(3回)、オンライン研修(5回)を実施する。

5. 学びの特徴
①主体的、対話的で深い学び
ワークショップやブレイクアウトルームでの、対話による双方向の学びを重視
②事前事後課題による学びの定着
参考図書の購読、ミニレポートや学習者ポートフォリオ作成を通した成長の記録
③目標とプロジェクト設定による現場と研修の往還
１年間の目標を具体的に設定し、対面研修ではプロジェクトデザインを実施
④学習者同士の自主ゼミ開催
研修の振り返りや実践の共有を目的とした学びの場を形成

6. 研修の活かし方、学び方(昨年度受講者の声)
・月１の研修を定期検診のように利用し、自身の活動を客観的に見つめながら、次の１カ月で意識したいこと・試したいことを持つようにした。
・研修の事前課題を先生と話すきっかけとして活用し、その会話の中で、先生の悩みを聞くことができ、自分のポジションを確立することができた。
→学校と地域がゆるやかに連携しながら同じ方向を目指す。
良い対話ができるよう、学校と地域の関係の質を上げることが大切である。

(3) 令和６年度 高校CNオンライン研修⑥

タイトル：「未来の兆しのつかみ方、つなぎ方」
研修形態：Zoom Meetingによるオンライン形式
日　　時：令和６年７月２日(火) 14:30～16:30
主 催 者：一般財団法人 地域・教育魅力化プラットフォーム、三菱UFJリサーチ＆コンサルティング、文部科学省
講　　師：太田 直樹 氏(New Stories 代表、地域・魅力化プラットフォーム 評議員)
参 加 者：真子 静佳(普通科改革支援コーディネーター)

～研修内容～
1. 話題提供
・3つの兆し
→①答えから問いへ
高校生マイプロジェクトの実践者数は、2023年度には約10万人となり、全国で課題解決型探究学習が盛んになっていることが分かる。その中で問題視していることは、「課題解決の悪循環」である。ある問題の“裏返し”を課題にすると、計画の段階では良さそうに見えても、実行後に解決に至らないことがある。(例：「若者の流出」という問題に対して、「若者の流出防止」を課題と設定する)何度も自問自答する中で本当の問いは何かを考え、意志を持って行動することが、現在の探究なのではないか。
②分断から近接へ
近年、リアル空間の個人化や未婚率・一人世帯率の上昇等、人々の生活は分断化・細分化され、特に、テクノロジーの著しい発展に対しては不安や不満の声も聞こえるようになってきた。一方で、欧州を中心に広がってきた「リビングラボ(住民が主体となって暮らしを豊かにするためのサービスやモノを生み出し、より良いものにしていく活動)」が日本でも見られるようになってきた。→心地よい近接(サードプレイス)の誕生。
③越境人材の時代
三大都市における18歳以上の居住者のうち、約1,080万人が関係人口として、日常生活圏、通勤圏以外の特定の地域を訪問している。(例：地域おこし協力隊、コミュニティナース等)「弱いつながりの強さ」→社会的つながりが緊密な人より、弱い社会的つながりを持つ人のほうが、有益で新規性の高い情報をもたらしてくれる可能性が高いという、マーク・グラノヴェッターによる仮説。学校を起点とした「弱いつながり」をどのようにつくっていくか。

2. 対話と全体共有
・内容
→ブレイクアウトルームにて４名で意見交換の後、全体での情報共有。今回の研修では、「未来はこうなる」という答えがあるわけではなく、講義や対話を受けて、「自分なりにどう意味付けするか」が重要であった。学校とCNという関係性にもオセロの隅のような側面があり、学校とCNは互いに畑違いの存在だからこそ、奇想天外な新しいアイデアが生み出される可能性があるのではないか。

3. 事務連絡
・次回研修：令和６年８月８日(木) 10:00-17:00、９日(金) 9:00-16:00
タイトル：①プロジェクトをつくる
②ワークショップデザイン
研修形式：対面形式
場　　所：桜美林大学新宿キャンパス
講　　師：今村 亮 氏(株式会社Discovery Studio代表取締役 教育コーディネーター)

(4) 令和６年度 高校CNオンライン研修⑦

タイトル：「STEAM教育の実践」
研修形態：Zoom Meetingによるオンライン形式
日　　時：令和６年８月30日(金) 14:30～16:30
主 催 者：一般財団法人 地域・教育魅力化プラットフォーム、三菱UFJリサーチ＆コンサルティング、文部科学省
講　　師：森田 裕介 氏(早稲田大学 人間科学学術院 教授)
参 加 者：真子 静佳(普通科改革支援コーディネーター)

～研修内容～
1. 話題提供
・STEAM教育とは、誰のためのどのような学びか
→Society5.0を背景とした予測不能な時代を生きていく人材を育成するための教育
実社会の問題を探究し、課題解決する教科横断的な学びであり、創造的な活動(ものづくりやプログラミング)を含む学びである。下記は５つの要件
①実社会・実生活に自ら関わり、社会実現(実装)を目指す。
②問題解決に向けて「ありたい姿」を見出し、「あるべき姿」を描く。
③問題を見出し、その問題の原因を分析し、課題を設定し、その課題を解決する。
④「探究」と「創造」を往還する試行錯誤を通して問題を解決する。
⑤STEAMの複数の領域に横断的・総合的に取り組む。
・STEAM教育のデザイン
→各教科からみたSTEAM教育
・探究活動(Science、Mathematics)
自然を探究(Inquiry)し、普遍的な法則を発見する理科や数学科
人間の活動を地理的・社会的に学ぶ社会科
・課題解決活動(Technology,Engineering)
ものづくり・プログラミングを中心とした図画工作、技術・家庭科
プログラミング的思考等を含む情報科
健康に生きるための保健体育
・創造的活動(Arts)
美術・音楽・書道等の芸術
幅広い教養を意味するリベラルアーツ
・STEAM教育における「問い」
→教科横断的な学習における問い

統合の度合い	アプローチ	特に育成される資質・能力	問い		
			内容	役割	目的
低	Thematic	教科に固有な概念や個別スキル	各教科の知識やスキルに関する問い	各教科とテーマをつなげる	各教科の知識やスキルの習得
↑	Interdisciplinary	教科等を横断する概念や汎用的スキル	鍵となる概念やスキルに関する問い	教科間をつなげる	汎用的な能力の獲得
↓ 高	Transdisciplinary	実世界での課題を解決する能力	本質的な問い	実社会の課題と学習内容をつなげる	体系的な知識を用いて実世界との関わりを意識した探究

2. 対話と全体共有

・STEAM 教育の実践を「教科」「教科横断」「統合」のレベルごとにまとめ、議論する

→ブレイクアウトルームにて 4 名で意見交換の後、全体での情報共有。事前課題「自校での STEAM 教育の実施状況」について共有し、それをもとに、各学校の事例を「教科」「教科横断」「統合」それぞれのレベルに落とし込んで可視化した。教科横断的な授業を通して、ものごとは様々な分野が絡み合って成り立っているということを学び、その視座や思考をもって、実社会の課題を解決する統合的な学び・創造的な活動につながるとよい。しかし、それを実現するための環境や、教員のレディネスは万端ではない現状である。このような状況を踏まえ、STEAM 教育の実践において高校 CN の立場からどのようなことができるのか、考え続ける必要がある。

3. 事務連絡

・次回研修：令和 6 年 9 月 30 日(月) 14:30-16:30

タイトル：「生徒指導とチーム学校」

研修形式：Zoom Meeting によるオンライン形式

講　　師：新井 肇 氏(関西外国語大学 教授)

(5) 令和６年度 高校CNオンライン研修⑧

タイトル：「『生徒指導提要（改訂版）』が示すこれからの生徒指導の方向性－チームで支える生徒指導の推進－」
研修形態：Zoom Meetingによるオンライン形式
日　　時：令和６年９月30日(月) 14:30～16:30
主 催 者：一般財団法人 地域・教育魅力化プラットフォーム、三菱UFJリサーチ＆コンサルティング、文部科学省
講　　師：新井 肇 氏(関西外国語大学 教授)
参 加 者：真子 静佳(普通科改革支援コーディネーター)

～研修内容～
1. 子どもの現状と生徒指導をめぐる問いの変換
・不登校
→コロナ禍での一斉休校後、急増傾向にある。「問題行動」ではないが、長期化すると引きこもりにつながる可能性もあり、社会で自立して生きることの障壁になってしまう。
問いの変換：「児童生徒はどうして学校に来ないのか」という問いから「児童生徒はどのような学校であれば来るのか」という問いへ。
・いじめ
→認知件数は増加傾向にある。「いじめを見逃すまい」という意識の表れも見て取れるが、一方で、いじめを背景とする自殺等の深刻な事態の発生は、後を絶たない状況である。
問いの変換：「いじめられた被害児童生徒をどう守るか」という問いから「児童生徒がいじめをしない人に育つにはどうすればよいのか」という問いへ。
・暴力行為
→小学校での発生件数の急増から、暴力行為の低年齢における増加が懸念される。スマホ等の普及により直接体験を通じた人間関係づくりの機会が減少し、対面的な人間関係における折り合いの付け方が未成熟なのではないか。
問いの変換：「児童生徒がどうすれば衝動性をコントロールできるのか」という問いから「どのような関係、どのような状況が衝動性を高めてしまうのか」という問いへ。
・自殺
→年々増加傾向にある。死因の第１位が自殺となっている先進国(G7)は日本のみ。
問いの変換：「社会で子どもが幸せになるにはどうしたらよいのか」という問いから「私たちがつくってきた社会は子どもにとって、本当に幸せな社会なのか」という問いへ。
・変動社会を生き抜く力の獲得
→経済協力開発機構(OECD)によると「変革を起こすために目標を設定し、振り返りながら責任ある行動をとる能力」がエージェンシーとして重視されている。
問いの変換：「多くの知識を身につけ、現実にどう適応するのか」という問いから「今ないものが現れたときにどう対応するのか、また、新たなものをどう創り出すのか」という問いへ。(学習観の転換)

2. 生徒指導とは
・生徒指導の目的
→「生徒指導は、児童生徒一人一人の個性の発見とよさや可能性の伸長と社会的資質・能力の発達を支えると同時に、自己の幸福追求と社会に受け入れられる自己実現を支えることを目的とする。」『生徒指導提要(改訂版)』
＝自己実現を目指す個人と責任ある社会づくりの担い手の育成。
・生徒指導の定義
→「生徒指導とは、児童生徒が、社会の中で自分らしく生きることができる存在へと、自発的・主体的に、成長や発達する過程を支える教育活動のことである。なお、生徒指導上の

課題に対応するために、必要に応じて指導や援助を行う。」『生徒指導提要(改訂版)』
＝「させる」生徒指導から「支える」生徒指導への転換。

・生徒指導の実践上の視点
→①自己存在感の感受　②共感的な人間関係の育成
③自己決定の場の提供　④安全・安心な風土の醸成

3. 社会に開かれたチーム学校

・校内の生徒指導体制づくり
→学年や分掌を横断するチームの編成、また、ミドルリーダー(学年主任、生徒指導主事、進路指導主事、保健主事等)による分野の垣根を越えた包括的な支援体制を確立することが重要である。

・学校内外の連携に基づく「チームとしての学校」
→教職員と専門職、保護者、地域の関係機関が子どもをめぐって協力し合う「パートナー」としての関係を築く。互いの専門性についての理解を深めるとともに、尊重し合うことが大切。子どもの危機は社会の問題という認識を共有する。

・生徒指導の観点から、CN がどのような役割を果たすかについて議論する
→ブレイクアウトルームにて 3 名で意見交換の後、全体での情報共有。教員とは少し違う立場にあるということや、学校外の人材との関わりを多く持つということに CN の特殊性があるのではないかという議論がなされた。また、常勤か非常勤か等の雇用形態によっても、その役割や生徒との関わり方は変容するかもしれないという意見も交わされた。

4. 事務連絡

・次回研修：令和 6 年 10 月 30 日(水) 9:30-16:30
タイトル：「システム思考とデザイン思考」
研修形式：対面形式
場　　所：三菱 UFJ リサーチ＆コンサルティング本社
講　　師：佐藤 真久 氏(東京都市大学 環境学部 教授)

(6) 令和6年度 高校CNオンライン研修⑨

タイトル：「地域学校魅力化概論～地域や学校が魅力的になるために何ができるのか～」
研修形態：Zoom Meetingによるオンライン形式
日　　時：令和6年11月14日(木) 14:30～16:30(当日校務のため、後日オンラインにて視聴)
主 催 者：一般財団法人 地域・教育魅力化プラットフォーム、三菱UFJリサーチ&コンサルティング、文部科学省
講　　師：豊田 庄吾 氏(三次市教育課次長 元海士町学びづくり特命官)
参 加 者：真子 静佳(普通科改革支援コーディネーター)

～研修内容～
1. なぜ、学びをひらくのか？
・学びをひらくと起こること
→①外のリソースを活用することで、全体としてのリソースの量が増える。
②真正(リアル)で実践的な学びをつくることで、リソースの種類が増える。
③越境的な学びをつくることで、自身の固定概念に気付き、アイデンティティの見直しが起こる。
・隠岐國学習センターの事例
→施設内に土間や縁側のような「ウチ」でも「ソト」でもない場所をつくり、誰もが足を踏み入れやすく、また心理的にも内外の線引きを感じにくい「敷居の低さ」を演出した。また、施設内は広く見渡せ、どこからでも人の姿が見えるようにすることで、思いがけない人と人(生徒と地域の人)の出会いや「非線形な学び」のきっかけにつながっている。
・「学びをひらく」の先にあるもの
→①学びを「ひらく」から学びを「まぜる」へ
地域の人と繋がることで、初めは地域の魅力やニーズを遠くのものに感じていた生徒が、徐々にそれらを身近に感じ、「わたしはこう思う。こうしたい。」という当事者意識を持つようになる。(学ぶ主体が「They」から「I」に多様化している。)
②学びの場を「ひらく」からプロセスを「ひらく」へ
学校の中だけでビジョンを作るのではなく、その過程段階から学校外の多様な人々に関わってもらうことで、学校・地域双方に変化が起こる可能性がある。(学ぶ主体が「I」から「We」に増えている。)
・「ひらく」を探究する
→①学びを「ひらく」には、組織の壁や自身の限界を、まずは乗り越える(溶かす)必要性がある。
②上記のような越境体験や環境変化を体験するためのプロセスを丁寧に作ることで、学びそのものの楽しさを実感することができる。教員は全てを管理するのではなく、ある程度は周囲や生徒に任せる余白を持つことも必要である。

2. 学校での学びは地域にどう貢献できるのか？
・地域の課題
→①コミュニティの弱体化　　②若者の流出/地場産業の衰退
高齢世代では「つながり」とは物理的な接触や一緒に何かを行うこと(行事への参加等)を重視するのに対し、若い世代ではデジタルなコミュニケーションやSNSを通じた関係も「つながり」として捉える傾向がある。このように世代が変わるごとに「つながり」の形が変化していることや、コロナ禍を経たことで、地域から見た「学校」の敷居が高くなっている。
・隠岐島前高校学校設定科目「生活ビジネス教養」の事例
→島のホテルから依頼を受け、ホテルマンの人材育成と高校生の学びを混ぜるプログラムを策定した。高校生が職場体験をしながら、大人のマイプロジェクトを応援・問い立てを行

う。高校生は職場体験を通して自身の視野や世界が広がり、大人は高校生とのインタビューで「素朴な問い」を受け、自身が無意識に持つ固定概念や思考の癖に気付くことができ、双方の学びを実現することができた。

・これからの方法論

→変化の激しい現代社会では、既存の方法や組織体系に関する考え方をまずは手放し、試行すること、その結果を内省することを高速で行き来することが重要である。学校管理職は、それをよしとする姿勢を持つことが重要である。

3. 地方行政とつきあう時に意識すべきことは

・地方自治体予算の仕組み

→①概算要求(前年度の秋～冬)

翌年度の事業計画に基づき、必要な予算額を概算要求する。

②予算編成(前年度の冬～翌年度の春)

各部局の要求を精査し、予算案が編成される。

③予算議決(翌年度の春)

事業の妥当性、予算の使い道について議会で審議・議決される。

④予算執行(翌年度4月～翌々年度3月)

定期的な進捗報告を行いながら、予算を執行する。

⑤決算(翌々年度の夏～秋)

年度内に執行した予算の支出状況を精査し、決算を報告する。

・教育改革推進のための予算確保におけるポイント

→①各段階において、関係部署との連携を密にすることが重要

②データに基づいた根拠を示すことで、予算獲得の可能性が高まる。

③教育改革の目的、事業計画、期待される効果を明確に説明することが重要

④柔軟な対応と継続的な努力が求められる。

4. 事務連絡

・次回研修：令和6年12月3日(火) 14:30-16:30

タイトル：「教育CSR企業・大学との連携」

研修形式：Zoom Meetingによるオンライン形式

講　　師：廣田 拓也 氏(株式会社ソフィア 代表取締役)

(7) 令和6年度 高校CNオンライン研修⑩

タイトル：「学校と企業の持続的関係性の構築」
研修形態：Zoom Meetingによるオンライン形式
日　　時：令和6年12月3日(火) 14:30～16:30
主 催 者：一般財団法人 地域・教育魅力化プラットフォーム、三菱UFJリサーチ&コンサルティング、文部科学省
講　　師：廣田 拓也 氏(株式会社ソフィア 代表取締役)
参 加 者：真子 静佳(普通科改革支援コーディネーター)

～研修内容～

1. マイスター・ハイスクール事業から見る連携協働の意義・価値
   ・マイスター・ハイスクール事業の概要
   →民間から人材を専門高校に管理職担当として派遣し、産業界や自治体と学校が一体となって、カリキュラムを開発していく事業。例：企業の部長クラスを専門高校の管理職に任用し、技術者を産業実務家教員として任用する。地域産業の進化を担う人材育成の仕組みの刷新を図る。
   ・産学連携による学校現場の変化事例
   →地元企業や大学等と関わることで、課題研究に責任感と主体性が生まれる等、生徒の学びへ向かう態度が変容した。また、大学進学がゴールという状況から、生徒自身が自分の人生においてなりたい姿を描いたうえで、手段として進路を選択できるようになった。
   ・産業界(企業)として、高校教育に関わることのメリット事例
   →「地域産業の発展を担う人材育成への貢献により、地域の企業としての社会的責任を果たすことができる。」「地域人材の募集・採用活動への活用」の回答の他、「高校生の素朴な質問や突拍子もない発想に刺激を受けた。慣習的に行っている研修や当たり前になっている感覚を再度見つめ直す機会となった。」等のメリットが挙げられた。
   ・「自己完結型人材」から「連携力重視型人材」へ
   →①地域に愛着を持ち、帰ってきたいと思える「人づくり」
   ②地域の産業を担う付加価値を生み出す人を育てる「産業づくり」
   ③住み続けたいと感じる「地域づくり」
   上記を個別に完結させるのではなく、歯車のように組み合わせて成長させることが、右肩下がり時代に求められる「人材サイクル」である。

2. 外部資源調達に向けた連携協働の段階と観点
   ・マイスター・ハイスクール事業での産学連携
   →従来は、企業・学校ともにキーパーソンだけで連絡を取り合う属人的・慣習的な連携体制であった。マイスター・ハイスクール事業では、両者の間にCNが入ることによって、取組が持続的になり連携体制基盤の構築につながった。
   ・専門高校と企業の関係性が深まるプロセス(マイスター・ハイスクール事業の事例から)
   →①学校
   どちらかからのお願いを聞くという関係ではなく、同じ目的のために一緒に行動する(企業と先生が一緒に授業の内容をつくる)ことで、学校教員が企業の視点を獲得できた。外部からの評価を受けることで、教員の主体性が高まり、教員間の対話が活性化した。
   ②企業
   生徒との交流の際に、自らをアップデートし続ける姿勢を持つことや学校文化を学ぶ姿勢をもつという担当者の心構えができた。
   ③両者
   組織同士の関係性構築、またその持続のためには、ビジョンの共有が最も重要である。

・連携・協働体制の段階(CN 自身の所属する高校はどこに位置するか考える)
→・持続的関係：協働的関係が定着し、異動があっても継続できる。活動がそれぞれの業務に組み込まれている関係性。
・協働的関係：学校と企業等が育てたい人物像を共有し、役割分担しながら「未来」にむけて協働している関係性。
・水平的関係：学校・企業等のそれぞれの利害が合致、活動の計画性・関連性は低いが「直近のメリット」に対して相互に協力し合う関係性。
・垂直的関係：学校・企業等のそれぞれのニーズに応じた取り組み方が中心。どちらかが相手の依頼に応えるだけの一方的な関係性。

高 難易度 低

・連携体制を高める観点
→①地域の産学連携体制の基盤(産業界と地方自治体の連携基盤)をつくること。
②産学連携コーディネート機能を高め、またその人材を育てること。
③学校・教員・生徒・経営者・社員・自治体職員それぞれに学びと変容があること。
④連携の有無ではなく、深さを評価基準にすること。

3. 企業等外部資源の調達方法
・協働活動とはなにか？
→目的の達成のために、平等な比率で「協力」し合うこと。同じ負担比率で共にその仕事を行うこと。
・企業における論理・判断基準
→①活動はすべて企業の目的や目標に沿ったものであること。
②活動にはすべて対価が伴うこと。→企業の目的に合致した価値と価値の交換。
対価としての価値：人的資本(技術や能力)、経済資本(お金)、文化資本(知識や体験)、社会関係資本(人脈)
※企業が営利団体であることを前提として、学校も向き合う必要がある。
・高校が提供できる価値は何か
→①企業の付加価値向上
地域産業が求める人材を前もって知らせることができる。新製品の開発を生徒の教育活動の中でリスクなく取り組める。
②地域のハブ機能
教育活動の連携を通して、学校に関係する産業・企業や自治体同士が出会い、新たな連携の機会が生まれる。
③イノベーション創出
企業と地域の高校生が連携することで、新しいアイデアが生まれる可能性がある。

4. CN の動き方
・協働的関係性を前提としたコーディネート活動
→①事業開発(営業活動)
価値と価値の交換による資源調達に向けた提案活動。学校教員からは話しづらいお金の話をするのも CN の役目。
②プロジェクトマネジメント
企業や自治体との取組を推進し、相互の価値交換を実現。
③組織開発(学校内・協働体制内)
関係する組織を共同体にしていく。

5. 事務連絡
・次回研修：令和 7 年 2 月 3 日(月) 10:30-16:30
タイトル：「ふりかえり」
研修形式：対面形式

8. 会議議事録(高校 CN 対面研修 3 回、高校 CN 全国フォーラム)

(1) 令和 6 年度 高校 CN 対面研修④

タイトル:「①プロジェクトをつくる ②ワークショップデザイン」
研修形態:対面形式
日　　時:令和 6 年 8 月 8 日(木) 10:00～17:00、9 日(金) 09:00～16:30
場　　所:桜美林大学新宿キャンパス
主 催 者:一般財団法人 地域・教育魅力化プラットフォーム、三菱 UFJ リサーチ&コンサルティング、文部科学省
講　　師:今村 亮 氏(株式会社 Discovery Studio 代表取締役 教育コーディネーター)
　　岡崎 エミ 氏(一般財団法人 地域・魅力化プラットフォーム)
参 加 者:真子 静佳(普通科改革支援コーディネーター)

～研修内容～
【1 日目】
1. 研修目的と目標設定(個人及びグループワーク)
・高校 CN 研修の目的
→①高校 CN の基本的な資質能力の習得、②高校 CN コミュニティの形成
・高校 CN レディネスルーブリックの理解と現在までの自己評価
→高校 CN に必要な①基礎・基盤的な知識、②コーディネート能力、③ファシリテート能力、④マネジメント能力、⑤エージェンシー(学びに向かう姿勢)について、事務局作成のルーブリックに基づいて自己評価を行った。自身の評価としては、達成度 2(高校 CN プレイヤーのレディネス)まではおおよそ到達しており、今後は達成度 3(高校 CN マネジャーのレディネス)を目指して日々の職務及び各研修に臨むことを目指す。
・今年度の目標設定
→自己評価を踏まえ、今年度の個人目標を設定しグループ内で共有。
目標:「八幡高校がこうなったら、もっとみんな楽しい(=生徒が育つ、教員の負担が減る、地域の活性化につながる等)」を考えて、わくわくを伝播し周囲をゆるやかに巻き込みながら変革を起こせる CN を目指す。
課題:学習環境設計力の向上
自校の課題感は、2 年間を通して掴めてきた。また、先生方との信頼関係も構築されてきたと感じている。今年度は、本校における探究学習の課題解決のために、実際に学習の場のデザインから実践までを先生方とともに行いたい。

2. 「現場を変える!プロジェクトのはじめかた」(今村氏によるレクチャー)
・なぜプロジェクトなのか?
→時代は、人口減少・少子高齢化の加速やデジタルテクノロジーの進化等により、「答えを誰かに与えられる」ものから「未来を自分でつくる」ものに変わりつつある。自身で課題を設定し、行動を起こすことのできる人材の育成が重要視されている。
・高校生のプロジェクト
→例:インターネット上にディズニーランドをつくった高校生
自身を含め、コロナ禍に生きる高校生が少しでも楽しめる場をつくりたいという思いから、マインクラフトを活用し、全国の高校生の協力を仰ぎながらシンデレラ城を制作。それにとどまらず、ディズニーランド・シーの各アトラクションを継続制作、定期的にフィールドを開放し、誰もが足を運べるデジタル空間を創出した。
・今村氏の事例
→桜美林大学にて、高大連携事業(ディスカバ!)を実践。講師から提供された探究課題に取

り組む形式の高校生探究活動について、①大学生メンターが関わる共成長モデル、②高校生から参加費を徴収しないビジネスモデルを導入している。

・教育現場のプロジェクト

→外発的動機づけと内発的動機づけの往還を通し、生徒が自ら課題設定できる場をつくる。また、自己の在り方と不可分な課題の発見と解決を促すために、教員だけでなく、学年をまたいだ交流や外部機関との連携を強化し、対話の総量を増やす。

3. 「対話と問いかけの方法」(岡崎氏によるレクチャー)

・対話とは？

→自然な雰囲気の中で行われる新たな意味づけをつくる話し合い。対話を通して「問い」に向き合う過程で、個人の認識は内省される。

・問いとは？

→人々が創造的な対話を通して認識と関係性を編み直すための媒体。問う側も問われる側も答えを知らず、創造的対話を促すトリガーとなる(ワークショップやファシリテーションの場で使用)。

・問いサンプル

→例：それは、具体的にどういうことですか？
具体的に必要なものはありますか？
本当の問題は何ですか？本当にしたいことですか？
それをすることは、あなたにとってどんな意味があるのでしょう？
いつまでに、どうなりたい？

4. プロジェクトデザイン中間発表とブラッシュアップ(個人及びグループワーク)

・内容

→事前課題として各人が作成したプロジェクト計画を発表し、質疑・対話の時間を設けた。「問いかけ」の時間であるため、アドバイスや学校の情報交換とならないように留意。自身が設定した課題が「本当の課題」であるか内省し、取組内容や期間に、より具体性を持たせるためのブラッシュアップを行った。

【2 日目】

1. プロジェクト発表(グループワーク)

・内容

→前日のグループワークでの対話をもとに練り直した各人のプロジェクト計画について、改めて発表及び質疑・対話を行った。このプロジェクトは各人が持ち帰り、実際に自校で実施をした上で、年度末の研修の際に成果報告を行う。

2. 「ワークショップとは・ワークショップデザインとは何か」(岡崎氏によるレクチャー)

・ワークショップとは

→参加者が自ら参加・体験し、グループの相互作用の中で何かを学び合ったり、創り出したりする、双方向的な学びと創造のスタイル。ファシリテーターは、参加者が自発的に作業する環境を整え、参加者全員が体験をできるよう運営する。

・高校 CN がワークショップを学ぶ意義とは

→これからは、学校の中だけでの合意形成に止まらず、地域・社会の人々とともに協働する場面も多くなる。その場において、参加者同士による相乗効果が生まれるよう円滑に進行するのが CN の役割である。

・ワークショップデザインの要素

→①目的・目標の設定
目的は、大目的とそれを構成する小目的で構成する。
大目的(生み出したいモノ・コト)＋小目的(参加者の関係性/個人の変容)＝目的の達成

目標は、定量・定性で測れるようにする(アンケート設計・見取りの工夫)。そもそも、この目的目標で良いかという批判的思考を持って検討する。

②参加のデザイン

ワークショップ開催の前に参加者へヒアリングをし、各々の活動・仕事・関心事の内容やモチベーションを把握し、信頼関係の構築と参加者の心の準備に繋げるようにする。また、参加しやすい日時の設定や雰囲気づくりを心掛ける。

③場のデザイン

場所は、目的と参加者に合わせて決めるようにする。

例：空間が広い→フレキシブル、エネルギーが拡散される

空間が狭い→親密な関係

椅子・机が可動→陣形の変更が容易

④プログラムデザイン

大まかには、下記の要素で構成される。

導入：挨拶、趣旨説明、アイスブレイク

知る活動：レクチャー系、情報シェア系、フィールドワーク系

創る活動：模造紙や付箋を使って意見やアイデアをまとめる、プロトタイプづくり

まとめ：発表＋講評、振り返り、次回の案内

ワークショップを通して、学びや変容を引き起こし、目的を達成できるようなプログラムを検討する。

⑤ツールのデザイン

基本のツールとしては、プロッキー(水性マーカー)、付箋、模造紙、コピー用紙、投票シール、ネームホルダー等が挙げられる。その他、言語化・問いの補助ツールやアイデア発想の補助ツール(カード)等があるので、目的に応じて適宜準備する。

3. 仮想高校のケースをもとに、ワークショップをデザインする(グループワーク)

・内容

→4 名 1 組でグループになり、仮想ケースをもとに、タイムテーブルの作成に取り組んだ。90 分の作業時間の後、グループ同士で互いのワークショップを発表。コメンテーターより、参加者 1 人ひとりの状態を丁寧に考え、目的に応じた場やプログラムのデザインをしているかという観点からフィードバックを受けた。

4. 事務連絡

・次回研修：令和 6 年 8 月 30 日(金) 14:30-16:30

タイトル：「STEAM 教育 アクティブラーニングと ICT 等」

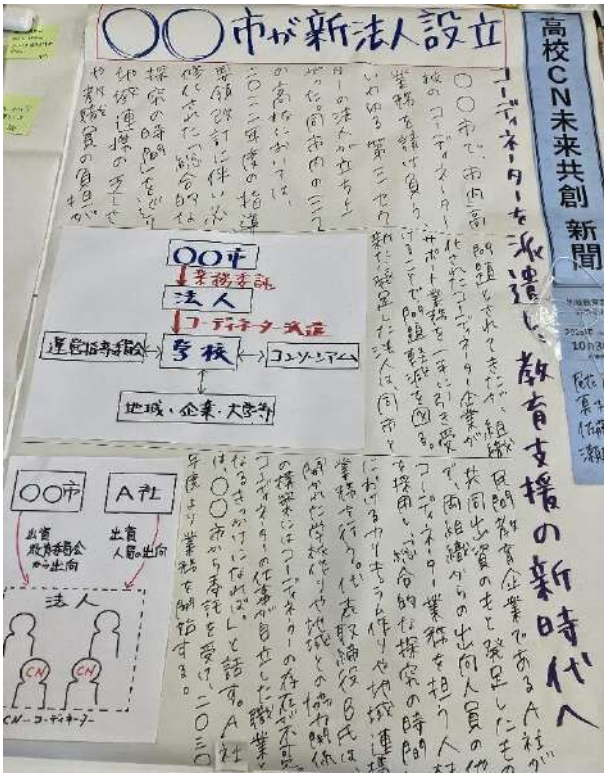
研修形式：Zoom Meeting によるオンライン形式

講　　師：森田 裕介 氏(早稲田大学人間科学学術院 人間科学部 教授)

(2) 令和６年度 高校 CN 対面研修⑤

タイトル：「高校 CN 未来共創新聞づくり～デザイン思考×システム思考によるビジョンづくりと、ビジョンから始めるプロジェクトデザイン～」
研修形態：対面形式
日　　時：令和６年 10 月 30 日(水) 09:30～16:30
場　　所：三菱 UFJ リサーチ＆コンサルティング本社
主 催 者：一般財団法人 地域・教育魅力化プラットフォーム、三菱 UFJ リサーチ＆コンサルティング、文部科学省
講　　師：佐藤 真久 氏(東京都市大学環境学部 教授)
参 加 者：真子 静佳(普通科改革支援コーディネーター)

～研修内容～
1. 高校 CN 未来共創新聞づくり(グループワーク)
・高校 CN 未来共創新聞づくりとは
→高校 CN の５年後(2029 年 10 月 30 日)の姿を具体的に描き、新聞の１面を作成する活動。ありたい姿(理想像)においてどのように協働しているかをイメージし逆算して考える「デザイン思考」と、現在の姿を認識し、有している資源・機会・能力を持ち寄り、どのように課題を統合的に解決すればいいのかを論理的に考える「システム思考」の接点となる５年後の未来像を考える。職員研修でのワークショップとして「未来共創新聞づくり」を実践し、教職員全体で学校の目指す未来像を検討したという福岡県純真高校の事例もある。
・作成において留意する点
→①ステークホルダーを洗い出し、巻き込むことができているか
②5W1H が明確であるか
③大見出し(結果)、小見出しが明記してあるか
④探究のプロセスと関連づいているか
⑤文字だけでなくイメージ図で視覚的に伝えているか
・作成した高校 CN 未来共創新聞
→所属したグループでは、５年後に、とある市で高校 CN 業務を請け負う法人が立ち上げられたという新聞を作成した。市(行政)と教育関連企業が共同出資することで、高校 CN の持続的・安定的な雇用と、市内高校の充実した探究活動の機会均等が実現されることを目標としている。
他グループでは、「高校 CN が全国の学校に配置」や「高校 CN を配置することの義務化」等、高校 CN を存続するための仕組みの実現を掲げているところが多く見られた。
各グループの新聞内容について発表を聴講し、「革新性」「実現可能性」「提案」の３つの観点から互いにフィードバックを行った。



2. ビジョンづくりから…問題分析/目的分析/プロジェクト策定へ(グループワーク)

・高校 CN 未来共創新聞を活かして考える

→作成した未来共創新聞に描かれた未来像を実現するために、ロジックツリーを用いて問題分析・目的分析を行い、どのようなプロジェクトが策定できそうか、グループで検討した。

・問題分析・目的分析・プロジェクト作成の考え方

→①中心問題

直面する問題は何か？

②直接影響

中心問題が起こった結果、考えられること・起こり得ることは何か？

③直接原因

中心問題の原因として考えられることは何か？

④中心目的

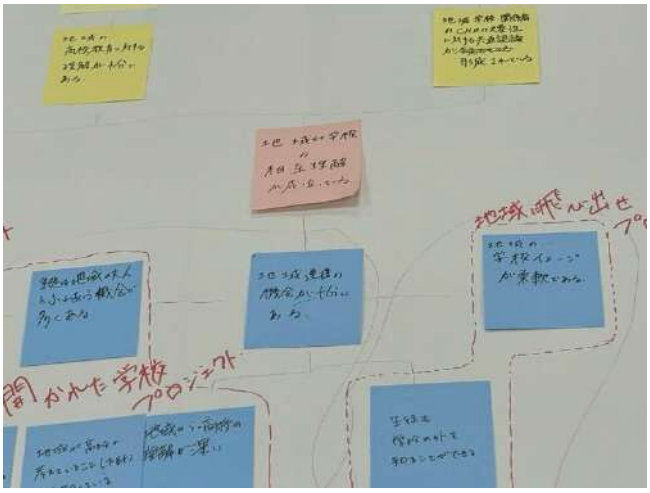
中心とする目的は何か？

⑤直接目的

中心目的を達成した場合、考えられること・起こり得ることは何か？

⑥直接手段

直接目的を達成するために取ることができる手段は何か？＝プロジェクト



3. 事務連絡

・次回研修：令和 6 年 11 月 14 日(木) 14:30-16:30

タイトル：「地域学校魅力化論」

研修形式：Zoom Meeting によるオンライン形式

講　　師：豊田 庄吾 氏(三次市教育課次長 元海士町学びづくり特命官)

(3) 令和６年度 高校 CN 対面研修⑥

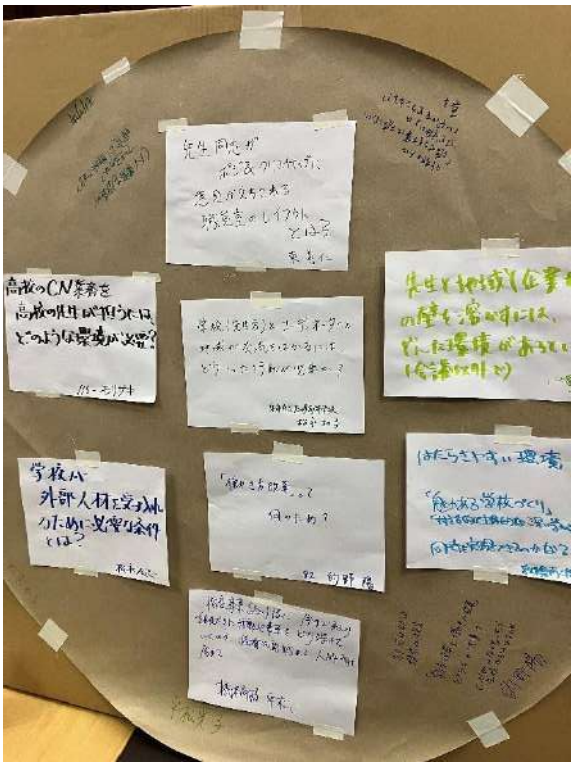
タイトル：「プロジェクト成果発表とリフレクション」
研修形態：対面形式
日　　時：令和７年２月３日(月) 10:30～16:30
場　　所：文部科学省東館３階講堂
主 催 者：一般財団法人 地域・教育魅力化プラットフォーム、三菱 UFJ リサーチ＆コンサルティング、文部科学省
参 加 者：真子 静佳(普通科改革支援コーディネーター)

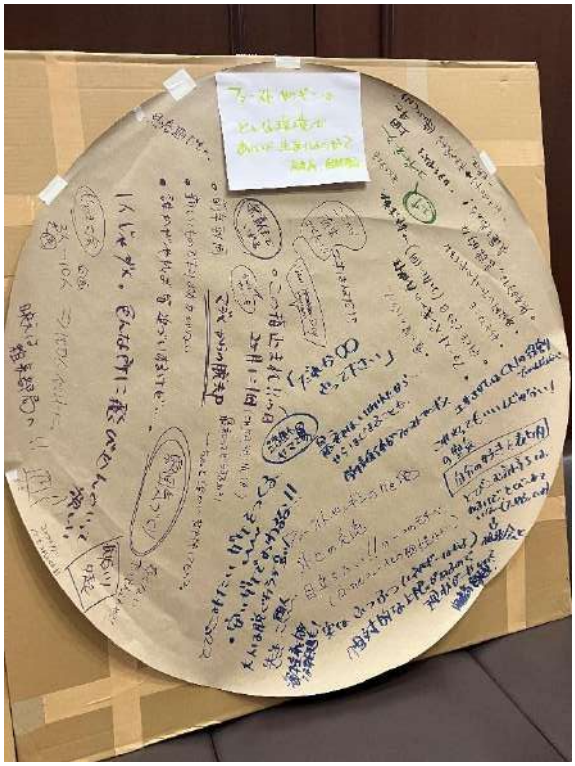
～研修内容～
1. １年間のプロジェクトの成果発表
・発表の仕方について
→5 人１組のグループに分かれ、各人が自身で取り組んだプロジェクトについて順番に成果を発表する。１人当たり発表８分＋フィードバック 10 分＋休憩２分。
・発表内容
→発表者は以下の観点を軸に成果発表を行い、聴講者はそれに対するフィードバックや質問を行った。
①計画：なぜそのプロジェクトをやろうと思ったのか。目標・目的は何だったか。
②アクション：具体的に取り組んだことは何か。
③結果：想定していた結果・実際の結果はどうだったか。
④経験：どんな経験だったか。うまくいったこと・うまくいかなかったことは何か。
⑤学び：なぜうまくいったのか。なぜうまくいかなかったのか。
⑥法則：経験から言えることは何か。他の場面でも当てはまりそうなことは何か。
⑦計画：学んだことを次にどう活かすか。
・自身のプロジェクト
→概要：１学年２学期の探究活動プログラムについて、教員とともに策定・実施する。
①計画：プロジェクトの目的は、より早い段階で生徒に探究のサイクルを体験させ、１学年と２学年の探究学習に繋がりと広がりを持たせること。
②アクション：１学年２学期の「班別探究」について、担当教員と共に計画し、実施支援をする。外部協力者への交渉・調整(16 名)。
③結果：高校魅力化アンケート及び生徒・外部協力者・教員向けのアンケートで、実施の効果や当事者の感想・意見を集計した。
④経験：生徒も外部協力者もおおむね満足度の高い取組となり、生徒が主体的に探究活動に取り組む様子も見てとれた。しかし、各担当教員と外部協力者との距離が想定していたよりも縮まらず、両者の関係性が中途半端になった教室もあった。
⑤学び：班別探究の目的や目指す生徒像を内外ともに明確な言葉で伝えられていなかったために、生徒に探究のサイクルを経験させること自体が目的となってしまった。
⑥法則：何か新しいことに取り組む際には、まず関係者全員に分かりやすい形で目標を共有することが必要である。
⑦計画：関係者の共通言語で目標設定をする。本校のスクールミッションや八高オクタゴン等、生徒・教員・外部協力者にとって同じ温度感で分かる言葉を使用する。

2. 対話の時間
・オープンスペーステクノロジー
→参加者が情熱と責任をもって話し合いたいテーマがすべて取りあげられ、オープンな話し合いによってアクションプランが生み出される技法。持ち寄った問いを同分野ごとに分類してテーブルを作成し、以下のルールに則って話し合いを行う。
①ホストは、なぜこの問いで対話したかったのかを説明する。

②テーブルを移動する人(マルハナバチ・蝶々)も、ここに来た理由を話す。
　マルハナバチ：グループからグループへと移動し、法則や共通点を見つける。
　蝶々：自由に移動する。オープンスペーステクノロジーのホストの場合もある。
③自由に対話する。対話の記録は必ず残しておく。
④対話の途中でも、マルハナバチや蝶々になってテーブルを移動してよい。
⑤終了時間前に対話を終えてもよい。

・対話の記録





(4) 令和6年度 高校CN全国フォーラム

目　　的：高等学校改革、高等学校の特色化・魅力化を推進するための高校CNの配置について普及・発信する。
実施形態：対面形式
日　　時：令和7年2月4日(火) 10:00～16:00
場　　所：文部科学省東館3階講堂
主 催 者：一般財団法人 地域・教育魅力化プラットフォーム、三菱UFJリサーチ&コンサルティング、文部科学省
参 加 者：廣濱 一郎(指導教諭)、真子 静佳(普通科改革支援コーディネーター)

～フォーラム内容～
1. 報告「新時代に対応した高等学校改革の推進について」
文部科学省初等中等教育局 参事官(高等学校担当)付
・高等学校改革が推し進められる背景や現状と課題、具体的方策についての説明がなされた。
(多様な学習ニーズへの対応と質保証を実現するための体制や実施事業、財政措置等)

2. 報告「高校CN全国プラットフォーム構築事業の3年間の総括と展望」
三菱UFJリサーチ&コンサルティング、一般財団法人地域・魅力化プラットフォーム
・①事業の背景と目的　②エコシステム研究会実施結果　③高校CN全国フォーラム実施結果　④PDCAサイクル構築のための採択校ヒアリング結果　⑤高校CN研修実施結果　⑥「高校CNスタートガイドブック」の作成状況　⑦今後の課題と展望について報告がなされた。その中で、高校CN・学校教員・県教委の3者による事例紹介として本校も登壇し、それぞれが力を発揮するための環境や関係性の構築について発表を行った。その後、高校CN研修の振り返りとして4名の受講者が登壇し、研修を通しての学びや、それを今後どのように活かしていきたいかについて発表を行った。

3. 講演「高等学校の教育改革に向けて」
文部科学省初等中等教育局 主任視学官 田村 学 氏
・主体的・対話的で深い学びの視点による授業改善
→主体的な学び：学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる学び
対話的な学び：子ども同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の教えを手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める学び
深い学び：学びの過程の中で、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見出して解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう学び(知識・技能の活用・発揮→探究のプロセスと重なる。)
・カリキュラム・マネジメントの3つの側面
→①各教科等の教育内容を相互の関係で捉え、学校の教育目標を踏まえた教科横断的な視点で、その目標の達成に必要な教育の内容を組織的に配列していくこと
②子どもたちの姿や地域の現状等に関する調査や各種データに基づき、教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のPDCAサイクルを確立すること
③教育内容と、教育活動に必要な人的・物的資源等を、地域等の外部の資源も含めて活用しながら効果的に組み合わせること
特に①については、カリキュラム・デザインの上で重要視したい内容である。
・カリキュラム・デザインの縦・横
→「高等学校学習指導要領(平成30年告示)第1章『総則』第2款」にもあるとおり、総合的な探究の時間や教科横断的な視点をカリキュラム・デザインの軸に置くことは、社会に開かれた教育課程を実現する上でも必要不可欠となっている。

4. ワーク「高校改革の推進及び高校 CN の更なる活躍に向けて」

・ワールドカフェとは

→少人数のグループ対話を通じて、多様な視点を共有しながらアイデアを深める手法。リラックスした雰囲気の中でオープンな対話を促し、新たな発見や洞察を生み出すことが目的である。

・進行の流れ

①「高校改革を推進する高校 CN の活躍を阻む問題は何か」(30 分)

各自、付箋に自分の考える課題を書き出した後、テーブルの参加者でそれを出し合い、因果関係や相関関係を整理し、深める。

②「問題解決に向けて、誰が、何を、どのように取り組んだらよいか」(25 分)

ファシリテーター以外の参加者が別のテーブルに移動し、新たなメンバーで対話する。「えんたくん(直径１mほどの円形ダンボールの上に円形のクラフト用紙を乗せて、話し合った内容などを書いていくことができるコミュニケーション・ツール)」に自由に書き込み、アイデアを可視化する。

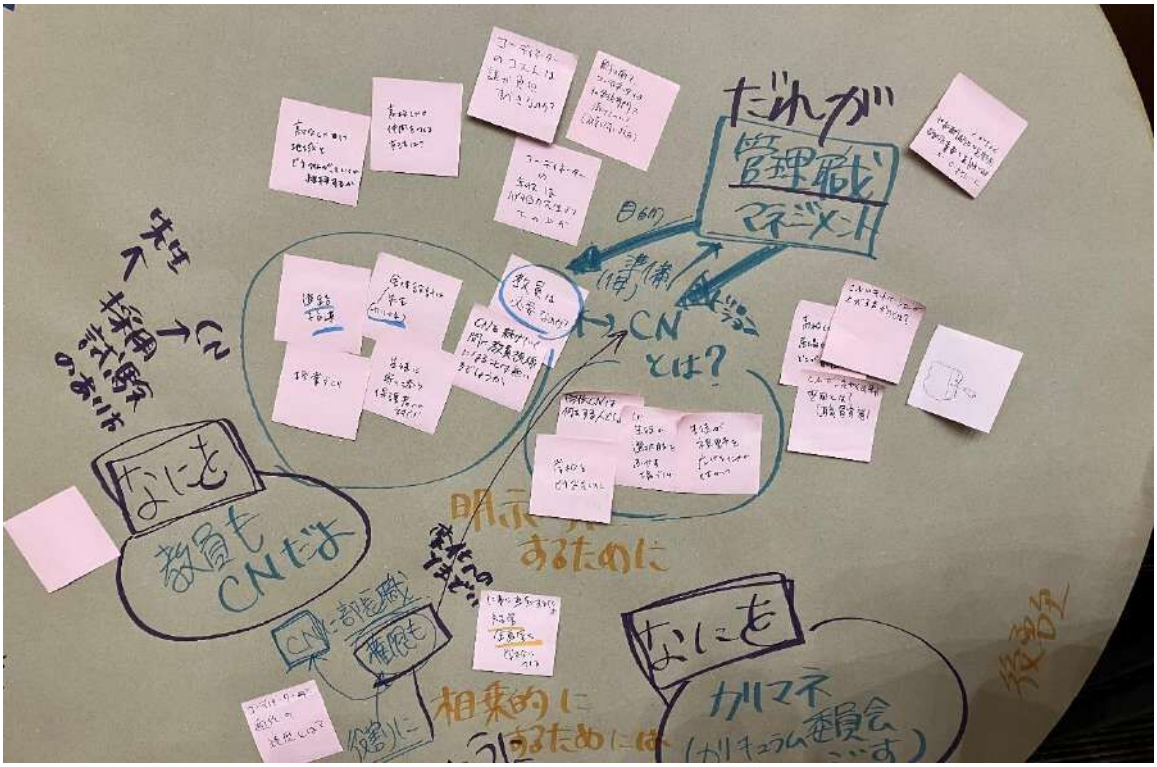
③「問題解決に向けて、誰が、何を、どのように取り組んだらよいか」(20 分)

ファシリテーター以外の参加者は元のテーブルに戻り、②で話された内容をファシリテーターが説明する。他のテーブルでの意見も参考にしながら、さらにアイデアを深掘りする。

④「振り返り」(10 分)

ワールドカフェ形式の対話を通じて、明日からやってみたい「エレガントミニマムステップ」を個人で検討する。その後、グループの中で、感想と次のステップを紹介し合う。

・対話の記録



9. 先進校視察

普通科改革支援事業採択校に共通する課題
　普通科改革支援事業の概要　予算執行　新学科設置に向けた取組　運営指導委員会・コンソーシアムの実施体制　コーディネーターの役割・業務　新学科における特色・魅力ある取組

学校名及び訪問内容	日付	訪問者
熊本市立必由館高等学校 （普通科改革支援事業採択校） ・「文理総合探究科」について ・学校設定教科「必由学」について ・学校設定教科の評価について ・指定終了後の対応などについて	令和７年２月 13 日（木）	指導教諭 　廣濱 一郎 教諭 　松永 一平 コーディネーター 　真子 静佳

10. 会議録

日程	時間	内容	校内	校外	オンライン	視察
04/16(火)	08：45～09：30	第1回研修部会議	○			
04/30(火)	08：45～09：30	第2回研修部会議	○			
05/13(月)	08：45～09：30	第3回研修部会議	○			
05/16(木)	15：00～16：30	令和 6 年度 新時代に対応した高等学校改革推進事業（高校コーディネーター全国プラットフォーム構築事業） 事業説明会			○	
05/29(水)	15：15～16：15	第1回運営指導委員・コンソーシアム合同会議	○			
07/02(火)	14：30～16：30	令和 6 年度高校 CN オンライン研修⑥			○	
07/08(月)	09：30～12：00	名城大学附属高等学校				来校
07/08(月)	08：30～11：30	鹿児島県立屋久島高等学校				来校
08/08(木) 08/09(金)	10：00～17：00 09：00～16：30	令和6年度高校CN対面研修④ (於 桜美林大学新宿キャンパス)		○		
08/30(金)	14：30～16：30	令和 6 年度高校 CN オンライン研修⑦			○	
09/02(月)	08：45～09：30	第4回研修部会議	○			
09/26(木)	10：00～16：00	令和6年度普通科改革推進事業指定校発表会 (於 文部科学省)		○		
09/30(月)	08：40～10：30	福岡県立田川高等学校				来校
09/30(月)	14：30～16：30	令和 6 年度高校 CN オンライン研修⑧			○	
10/07(月)	08：45～09：30	第5回研修部会議	○			
10/21(月)	08：45～09：30	第6回研修部会議	○			
10/29(火)	08：40～11：30	大阪府立狭山高等学校				来校
10/29(火)	09：30～12：00	福岡県教育センター				来校
10/30(水)	09：30～16：30	令和6年度高校CN対面研修⑤ (於 三菱UFJリサーチ&コンサルティング本社)		○		
11/11(月)	08：45～09：30	第7回研修部会議	○			
11/13(水)	15：55～16：45	第2回コンソーシアム運営会議	○			
11/14(木)	14：30～16：30	令和 6 年度高校 CN オンライン研修⑨			○	
11/15(金)	09：10～12：50	教科科目横断型授業公開	○			
11/18(月)	08：45～09：30	第8回研修部会議	○			
11/26(火)	09：00～12：00	島根県立益田高等学校				来校
12/03(火)	14：30～16：30	令和 6 年度高校 CN オンライン研修⑩			○	
12/09(月)	10：40～11：30	第9回研修部会議	○			
01/15(水)	11：30～15：30	兵庫県立姫路飾西高等学校				来校

日程	時間	内容	校内	校外	オンライン	視察
01/15(水)	15：55～16：45	第2回運営指導委員・コンソーシアム合同会議	○			
01/17(金)	09：30～12：00	岡山県立岡山一宮高等学校				来校
02/03(月)	10：30～16：30	令和6年度高校CN対面研修⑥(於 文部科学省)		○		
02/04(火)	10：00～16：00	令和6年度高校CN全国フォーラム(於 文部科学省)		○		
02/13(木)	09：00～12：00	熊本市立必由館高等学校				訪問
02/17(月)	10：40～11：30	第10回研修部会議	○			
03/17(月)	10：40～11：30	第11回研修部会議	○			

【福岡県立八幡高等学校】学際領域学科(令和6年度設置)

スクール・ミッション　自身の幸せな人生と、未来の幸せな社会を、しなやかに創造する心豊かな人材を育成する学校

文理分断的思考からの脱却

持続可能な社会をしなやかに根気強く創ろうとする姿勢

教科科目横断型授業

複数の教科科目を融合することで初めて見えてくる物事や事象の諸相を分析することで、学問と社会との繋がりや、生きる上での学問の意義を感得させ、自ら主体的に学問に向き合っていく姿勢を育成し、実践につなげる。

夢現∞プロジェクト

SDGsの実現やSociety5.0の到来に伴って生じる課題に着目し、将来の国際社会及び日本社会における課題の発見・解決に資する知識、技能の習得と、その活用に関わる思考力、判断力、表現力を育成し、実践につなげる。

特色ある教育活動

コーディネーター
❶学校と地域をつなぐ調整役
❷教員と生徒をサポート

運営指導委員会

管理機関・行政機関・教育機関で構成される
❶学校行事や教育活動に関する指導・助言
❷カリキュラム検討に関する指導・助言
❸事業全体に関する指導・助言

指導・助言

コンソーシアム

八幡高校・行政機関・教育研究機関・地元企業で構成される
❶カリキュラムの検討
❷評価方法に関する検討
❸事業進捗状況の確認
❹探究活動への指導・助言
❺生徒探究活動への参加協力

関係機関との連携・協働体制の構築

令和６年度の目標と取組

〈目標〉
○新学科「文理共創科」設置と関係機関との協働体制の継続
○特色ある教育活動の体系化と外部への情報提供(公開授業等)推進

〈取組〉
○意識調査の実施
○定例会議(校内・運営指導委員会・コンソーシアム運営会議)の実施
○教科科目横断型授業と夢現∞プロジェクト成果発表会の公開

令和６年度の成果と課題

〈成果〉
○多角的な視点を持ち対話することの大切さを実感している(意識調査結果)
○多様な視点から指導・助言を頂き、産学官協働体制が強化された
○特色ある教育活動の成果を、広くPRすることができた

〈課題〉
○カリキュラムマネジメント(主に評価)に関して検討を継続する
○新たな関係機関との連携を密にし、専門的な視点から指導・助言を求める
○事業終了後のCNの継続配置

別紙様式５